フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック（下）
――第六章　交換すること――

飯　野　和　夫

Ⅲ．第六章「交換すること」

『言葉と物』とコンディヤックの関係を検討する本論文では、これまでに同書第三章「表象すること」におけるコンディヤックの思想への全般的な言及、第四章「語ること」におけるコンディヤックの言語理論への言及を検討してきた。第五章「分類すること」は古典主義時代の「博物誌」を扱うが、コンディヤックに関係する記述はない。続く第六章「交換すること」は「富の分析」を扱い、『商業と政府 *Le Commerce et le gouvernement*』で商業の問題を扱ったコンディヤックにも論及されることになる。以下、この論及を検討したい。コンディヤックへの論及は第六章第六節に現れるが、実は、この論及がこの章の中で占める割合はさほど大きくはない。しかし、この論及を理解するためには、まずはこの章全体の内容を把握する必要がある。そこで章の初めから順に論旨を追うことにしよう（以下の１～８の各項は、第六章の各節に対応している）。

１．富の分析

フーコーによれば、古典主義時代には「経済学 économie politique」と呼びうるものはいまだ存在しなかった。「知の秩序のなかに生産というものが実在しな」かったためとされる。問題になったのはむしろ、「価値 valeur、価格 prix、商業 commerce、流通 circulation、収益 rente、利子 intérêt の諸概念をそれぞれ部分的な対象として包含し宿らせる、きわめて整合的できわめてよく重なり合った層」、すなわち「〈富 richesse〉の領域」であった（MC, 177, J, 187）(1)。今列挙されたような諸概念は、十七、十八世紀には、「厳密で一般的な認識論的配置を地盤として思考されていた」とされる。これら諸概念の「分析を結びつける必然的関係は、それらの同時性の場である富の領域を明らかにすることなくしては理解できないであろう」（MC, 178–179, J, 188–189）。

「厳密で一般的な認識論的配置」とはフーコーのいう「エピステーメー」に違いない。フーコーは続ける。「ある文化のある時点においては、つねにただ一つの〈エピステーメー〉があるにすぎず、それがあらゆる知の成立条件を規定 définir する。（…）〔富にかかわる実践である〕一五七五年の三部会が命じた貨幣改鋳 réforme monétaire、重商主義的処置、ローの実験と

その清算は、(…)〔富にかかわる当時の〕諸理論と同じ考古学的台座をもっている。そして語らせなければならないのは、まさしく、知のこうした基本的必然性になのである。」(MC, 179, J, 189)

2．貨幣と価格――十六世紀

貨幣――物質的実在

古典主義時代の「富の領域」を検討する前段階として、フーコーは第二節「貨幣 monnaie と価格」において、先立つ十六世紀における富のあり方を一瞥する。フーコーによれば、この時代、「金属はそれ自身として富であるかぎり」において「富の尺度となる記号」とみなされた (MC, 180, J, 189)。フーコーはすぐに分析を展開する。「貨幣のもつ物質的実在性のうちに、商品 marchandises の共通の尺度と交換機構における代替物という、貨幣の二つの機能は根拠を置いている。(…) 貨幣がまことに尺度となるには、その単位は、現実に存在し、どんな商品もそれに照合することができる、そうした実在物でなければならない。(…) 貨幣の価値は、その含有する金属の量によって決められなければならない」(MC, 180–181, J, 190)。〔コペルニクス(1)〕

貨幣の商品化

ただし、実際には「貨幣は、(…) あらゆる等価物の絶対的原基ではなく、その交換能力、したがって交換における代替物としての価値が、その潤沢さと稀少性によって変化する一個の商品としての様相を呈する。つまり、貨幣もまた価格をもつのである」(MC, 182, J, 192)。こうした文脈において、フーコーが注目するのはボダン Jean Bodin (1530–1596) である。フーコーはボダンの主張を次のように紹介している。「〈新世界〉から輸入された金属の量の増加〔により、〕(…) より多量の鋳塊を所有する (…) ようになった君主が、より多くの、しかもより良質の鋳貨を鋳造し、そのため同一の商品に対して以前より多量の金属が与えられるようになった (…)。価格の上昇には、だから一つの『主要な原因』があり、それはまさしく『金銀の豊富さ』、『事物に評価と価格とを与えるものの豊富さ』にほかならない」(MC, 183, J, 192)。〔グレシャム Gresham, マレトゥロワ Malestroit, ボダン Bodin〕

さて、十六世紀の知のあり方をめぐるフーコーの考え方については、本論文でもこれまでに折にふれて紹介しているが(2)、結局、彼は、富の考察も含めた十六世紀の知について次のようにまとめている。「この時代〔十六世紀〕には、諸記号は〔諸事物間の〕さまざまな類似 ressemblances によって〔事物として〕成立したが、これらの類似が認知されるためにまた諸記号〔＝諸類似物〕を必要としていた。ここで、貨幣という記号は、自らの交換〔における〕価値 sa valeur d'échange を規定し標識として成り立つためには、〔実在物としての〕一定量の金属を基礎とするほかはないが、その金属がまた他のすべての商品の秩序のなかで自らの価値を規定することになる(3)。欲求 besoins の体系における交換が、認識の体系における相似(4) に照応

することを容認するならば、ルネッサンスをつうじて、自然に関する知と貨幣に関する反省あるいは実践が、いずれも〈エピステーメー〉のまったく同一の布置によって規制されていることが理解されるであろう」(MC, 183, J, 193)。＜貨幣の基礎である 0．金属も一つの 1．商品である＞とするボダンらの富を巡る考察は、十六世紀時点での到達点と見えるが、この見解も、フーコーの視点からすると、当時のエピステーメーの帰結であることになる。〔ダヴァンザッティ Davanzatti〕

3．重商主義――古典主義時代

表象作用としての交換の優位

第三節「重商主義」において、フーコーは、古典主義時代における富をめぐる思考の検討へと進む。フーコーは、十六世紀の思考との関連から説き起こす。「ルネッサンスの『経済学者』たちは、貨幣がもつ商品の 2．尺度となる適性および交換可能性が、貨幣の 1．内在的価値にもとづくと考えていた。(…) 美しい金属は (…) 1．〈値打 prix〉をもち (…)、他のすべての値打の 1′〈尺度〉となり (…)、値打のあるあらゆるものと 2．〈交換〉できた (…)。十七世紀においても、貨幣は依然としてこの三つの特性をもつとされるが、その三つはすべて、もはや最初の特性（1．値打をもつこと）にではなく、最後の特性（値打のあるものに 2．代わること）にもとづくと見なされる。(…) 交換機能こそが、他の二つの特徴の基礎となったのである（1′ 尺度となる適性と、1．値打を受けとる能力とは、いまやいずれも、2．交換の〈機能〉から派生する〈性質〉という様相をおびるのである）」(MC, 185–186, J, 195)（1，2 といった数字は筆者が便宜的に付した。他の符号等を付する場合もある。本論文末尾の注の冒頭の注意書きも参照のこと）。

フーコーによれば、この転換はいわゆる「重商主義」の「反省と実践の総体」においてなし遂げられる。「『重商主義』が富と貨幣のあいだに設けたのは、(…) 貨幣を、富を表象し分析するための道具とし、逆に富を貨幣に表象される内容とする、反射的な分節関係 articulation réfléchie だったのである。(…) 重商主義の時代になると、『貴重なもの précieux』の〔十六世紀的な〕円環が破れ、富は欲求と欲望の対象として展開される。富は分割され、それらの記号である貨幣のはたらきによって互いに置換される」(MC, 186, J, 196)。十六世紀には、貨幣も、一定量の金属を基礎とした価値あるものとして交換の過程に入っていた。そのことを「貴重なものの円環」と呼んでいると思われる。一方、重商主義時代には、富はまず欲望の対象であり、貨幣は個別の富を表示（表象）し、その富の置換ないし交換の仲立ちをすることを第一の役割とするようになるのであろう(1)。

記号としての貨幣、事物の価値の由来

フーコーは富の性格について補足している。「重商主義が『富』と呼ぼうとしているのは (…) 表象可能であるうえに欲望の対象となるような、そうしたすべての事物である。さらに

いいかえれば、『必要性 nécessité、有用性 utilité、楽しみ plaisir、希少性 rareté』〔シピヨン・ドゥ・グラモン〕の性格をおびた事物である』」(MC, 187, J, 196)。一方、金銀は、貨幣となることで、実際以上の有用性、希少性を与えられる。「『貨幣が価値あるものとされるのは、その材料となる物質のゆえではなく、君主の象徴または標識であるその形態のゆえである』〔シピヨン・ドゥ・グラモン〕。金が貴重なのはそれが貨幣だからである（…）。貨幣は（そしてその材料となる金属も）その純然たる記号としての機能からその価値を受けとることとなる」(MC, 187, J, 196–197)。フーコーはこうして、貨幣であることによる価値の増大という視点を提起しつつ、関連する論点へとさらに踏み込んでいく。「このことから必然的に二つの帰結がもたらされる。1）まず、事物の価値が金属に由来するものではなくなることだ。事物の価値は、貨幣に依拠することなく、有用性、楽しみ、稀少性という規準にもとづいて独自に決定される。（…）金属はたんにこの価値を表象することを可能にするのにすぎない。（…）富はそれを私たちが評価するゆえにこそ富なのである。貨幣という記号や言語記号は、そのうえに補足的に付加されるものにすぎない」(MC, 187–188, J, 197)。こうしてフーコーによれば、重商主義の議論は有用性などを援用することで、後段でコンディヤックも引きつつ検討される「心理学的理論」に類する内容を含むことになる。〔シピヨン・ドゥ・グラモン Scipion de Grammont〕

次いで、フーコーは彼の考える第二の帰結に進む。「2）しかし、それ自体としてはほとんど富といえない金銀が、なぜこのような記号となる能力を受けとり、あるいは獲得したのだろうか。（…）金銀のもつ無限の表象能力〔のゆえである〕（…）。金銀は、硬く、永続性があり、変質しない微小な粒に分けることができ〔る〕。（…）『重商主義』は、貨幣を金属に固有な価値という公準から解放し――『金銭を他のものと同様の商品だと信じている人々の愚かしさ』〔ジョシュア・ジー、強調筆者〕――同時に、貨幣と富のあいだに表象と分析の厳密な関係を設定したのだ」(MC, 188 J, 197–198)。このように、フーコーは貨幣によって富を表象することの重要性に注目する。〔シピヨン・ドゥ・グラモン, シュルーダーSchroeder, モンタナーリ Montanari, ブートゥルーBouteroue, ジョシュア・ジーJosuah Gee, バーボン Barbon〕

しかし、この重要性から逆に、「貨幣自体が富」とみなされることにもなった。「成立の途上にあった古典主義的思考にとって、貨幣とは、富の表象を可能にするものである。そのような記号がなければ、富は、動きのない、無用な、いわば沈黙したままのものにとどまるであろう。この意味においては、まさに金銀が〔富を表象することで〕、人間の渇望するあらゆるものを創りだすと言える。（…）貨幣が富の記号でありうるためには、貨幣自体が富でなければならない。ただ、〔一般に〕表象はまず表象されてから記号となるのに対して、貨幣が富となるのはそれが記号だからである」(MC, 189, J, 198–199)。「貨幣が富」となることは、上で見た＜貨幣であることによる価値の増大＞にも通じていよう。〔デュムラン Dumoulin〕

貨幣の必要性

フーコーは貨幣の意味、重要性の考察をさらに進める。「こうした金属貨幣 argent が必要と

されるのは、さまざまな富を表象するため、つまり、外国からの輸入や国内での製造によって富を引き寄せ、富を出現させるためである。また、交換の過程において富を手から手へ移動させるためである。したがって、輸入により隣接諸国から金属を獲得しなければならない。(…) ところで、蓄積された金属は、停滞させておくべきものでも眠らせておくべきものでもない。金属を国内に引き入れたのは、交換によって国内で消費されるようにである」(MC, 189–190, J, 199)。貿易等によって金属を「獲得」し、「消費」しなければならない。「金属を消費」するとは、金属貨幣によって富を出現、移動させること、富を消費、享受することにほかなるまい。フーコーは続ける。「金属貨幣が現実に富となるのは、金属貨幣がその表象機能を完了するまさにそのかぎりにおいてである。つまり、それが商品に置き換わったり、商品の移動や待機を可能にしたり、原料に消費しうるものとなる機会を与えたり、労働の報酬として支払われたりするときのことである。したがって、国内における金属貨幣の蓄積が〔商品の〕価格を上昇させる心配はない。十六世紀における価格高がアメリカからの金の流入によるという、ボダンの立てた原理は成り立たない。通貨 numéraire の増加が最初は価格を上昇させるとしても、それは商業や製造業に刺激を与えるだろうし、富の量の増加とともに、正貨 espèces はそれだけ多くの要素のあいだに配分されるにちがいない。価格騰貴を恐れることはない〔Cf. 後段 p. 7〕」(MC, 190, J, 199–200)。貨幣の増加はたしかに「最初は」価格を上昇させるであろうが、それは結局、経済を「刺激」し活性化させるよい結果を生むであろう。そして究極的には、流通と交換が経済過程の基礎、根幹をなすことになろう。〔クレマン Clément, ベッヒャー Becher, トマス・マン Thomas Mun, シピヨン・ドゥ・グラモン〕

フーコーは総括的に言う。「(貨幣のおかげで) 財 biens が流通することができれば、財は増殖し富は増加する。順調な流通と貿易の黒字によって正貨の量が増大すれば、さらに新たな商品を引き寄せ耕地や製造所をふやすことが可能となる。それゆえ、ホルニックに倣って、金銀は『私たちの血のもっとも純粋なもの、私たちの力の精髄』(…)」だといわなければなるまい。(…) いまや、貨幣と富のいずれもが交換と流通の空間内部でとらえられる。(…) 金属に流通力を賦与するのは国家の権威にほかならない。ついで金属は (年金、俸給、あるいは国家の買い上げる調達品の報酬という形態で) 私人に再配分され、今度は第二の動脈的回路をたどりながら、交換、製造、耕作に刺激を与えるであろう。かくして流通が分析の基本的範疇となる」(MC, 190–191, J, 200)。〔ホルネック Horneck, ホッブズ Hobbes(2)〕

「交換と流通」が、フーコーが『言葉と物』第三章でその原理を示した「表象」に通じるものであることはすでに明らかであろう。「重商主義の経験をつうじて、富の領域は表象の領域と同一の様態にもとづいて成立する。(…)〔表象と〕同様に富は取り交わされる s'échanger 能力をもつ。また、相等と不等の関係を可能にするいくつもの部分に分析される能力をもつ。貴金属という完全に比較可能なあの富の要素を介して、互いに他の富の記号となる能力をもつ。(…) 世界のあらゆる富は、一つの交換体系に所属するかぎりにおいて互いに他の富と関係づ

けられる」(MC, 191–192, J, 200–201)。重商主義は、〈エピステーメー〉のレベルでは、「価格と貨幣に関する反省を、表象の分析の直線上に置こうとする、長いゆっくりとした努力と見える」とされる。「ゆっくり」であるのは、「貨幣と富の存在様態は、ひとつの〈実践〉全体、制度の一総体に結びついている」ために、新たな存在様態へ移行する変動が、言語や博物誌の領域におけるよりも時間を要したから、とされるのである(MC, 192, J, 201)。

4．担保と価格——貨幣

第三節における重商主義の経験の一般的分析を受けて、フーコーは第四節「担保と価格」で、特に十八世紀に入った時期の「貨幣と価格の理論」の具体的な分析へと進む。時代背景を一瞥しておけば、(かつて新大陸からの金の流入があったにもかかわらず、)十七世紀の終わりには、「貨幣に鋳造された金属があまりにも稀少」となり、「商業の沈滞、価格の低下、借金や年金や租税の支払の困難、地価の暴落」が生じた。だが、十八世紀にはいって、「通貨の量を増大させるため」の「度重なる平価切り下げ」や、「ローの実験」[1]を通して、「金属はふたたび現れ、価格は上昇し、地価は騰貴し、商業は活気をとりもどすことができた。一七二六年(…)の勅令は、十八世紀いっぱい持続する安定した金属貨幣を定める」ことになる(MC, 192–193, J, 201–202)。

担保としての貨幣——十七世紀末の認識の深まり

こうした経緯の中で、記号としての貨幣 monnaie-signe と商品としての貨幣 monnaie-marchandise という二つの主張が対立した、とふつう考えられている[2]。しかし、フーコーによれば、「〔これら所説の〕対立は表面的である」(MC, 193, J, 202)。〔テラソン Terrasson, デュト Dutot, モンテスキュー Montesquieu[3], ジョクール Jaucourt, パリ＝デュヴェルネ Paris-Duverney, ダゲソーd'Aguesseau, ムロン Melon, グラスラン Graslin〕

フーコーによれば、両者には共通の知の配置があり、それは「貨幣を担保として規定する配置」である。この規定は、ヴォーン Vaughan, Rice(?–1672)、ロック Locke, John(1632–1704)以来——つまり、十七世紀末以来——、記号としての貨幣説(貨幣記号説)、商品としての貨幣説(貨幣商品説)の違いにかかわらず見いだされるとされる(MC, 194, J, 202)。「貨幣が担保であるということは、貨幣が人々の同意によって受けとられた引替札 jeton(…)にほかならないということだ。しかしまた、貨幣が自らと引き替えられたものに正確に相当するということでもある。貨幣は、はじめと同じ量の商品、もしくはその等価物とふたたび交換されうるからだ。貨幣は、つねにその所有者の手に、先刻それと交換されたものを引き戻すことができる。表象作用において、記号がその表象しているものを思考のまえに引き戻すことができなければならないのとちょうど同じである。貨幣とは、(…)二重化される表象、先送りされた交換 un échange différé にほかならない」(MC, 194, J, 203)。実際、貨幣による取引は「補償となる行為をしばらくのあいだ欠く行為、担保をその実際の内容に再変換する逆向きの交換を約束

し予想する、未完の取引」（ibid.）なのだ。〔ヴォーン Vaughan, ロック Locke(4), ムロン, デュト, フォルボネ Forbonnais, ルトゥロン Le Trosne〕

「だが、貨幣という担保は、どのようにしてこうした保証を与えることができるのだろうか。（…）人は、〔貨幣商品説をとって〕貨幣に担保としての有効性を与える取引が、貨幣の材料である物質の商品としての価値によって保証されると考えることも、反対に、〔貨幣記号説をとって〕貨幣の外部にあるとはいえ、集団的同意もしくは君主(5)の意志によって貨幣に結びつけられている他の何らかの商品によって保証されると考えることもできる」（MC, 194, J, 203–204）。前節での論述の流れからすれば、フーコーが重商主義時代（古典主義時代）の考え方（エピステーメー）とみるものには貨幣記号説の方が合致していると言えよう。さて、ローは、「金属が稀少であることと金属の商品としての価値の変動を考慮し」、貨幣記号説をとった。「彼は、土地所有権 propriété foncière を担保とする紙の貨幣〔紙幣〕を流通させることが可能だと考えた」(6)。彼の「担保としての貨幣の理論」は「貨幣についてのあらゆる反省を可能に」することになった（MC, 194–195, J, 204）。しかし、「一七二六年に安定した金属貨幣が定められたとき」には、結局、貨幣商品説に沿った考え方が採用されたのである（MC, 195, J, 204）。さて、貨幣は商品を交換する際の「手段」だが、貨幣商品説の場合には、貨幣はそれ自体値打 prix をもつため、富の交換における「目的」ともなる。「だが、いずれの場合にも、貨幣は、さまざまな富とのある〈比率〉の関係と、それらを〈流通〉させるある種の能力とによって、事物の価格を定めることを可能にする」（MC, 195–196, J, 204）。貨幣が担保として何らかの富の価格を定めることは、一つの「指示」作用でもあるとフーコーは示唆している（MC, 196, J, 204）。〔ローLaw, テュルゴ Turgot(7)〕

可変的な価格体系

貨幣は富の価格を定めるのだが、「貨幣とさまざまな商品との関係、したがって諸価格の体系は、ある時点における貨幣あるいは商品の量が変わればただちに変化する。財に比して貨幣の量が少なければ、貨幣は大きな価値をもち、価格は低下するであろう。富に対してありあまるほど貨幣の量が増加すれば、貨幣の価値は下落し、価格は上昇するだろう。貨幣のもつ表象および分析の能力は、一方において通貨の量、他方において富の量にしたがって変化する」のだ（MC, 196, J, 205）。価格の上昇については、十六世紀の考え方については本論文 p. 2で、重商主義時代の考え方については p. 5ですでに見ている。それらを前提にフーコーは続ける。

ボダンらは「すでに十六世紀に、流通する金属の量の増加が商品の価格を上昇させることを知っていた」が、「このメカニズム(8)は、金属の内在的価値の低下に関連のあるものと見なされていた。十七世紀末には、この同じメカニズムが、貨幣の表象機能から出発して規定される。『なぜなら貨幣の量は取引の全体と比例関係にあるのだから』。金属の流通量が増大すれば、世界に実在するおのおのの商品は、いくらか多くの表象的要素〔貨幣〕をもちうるようになり、商品の量が増加すれば、おのおのの金属単位は、いくらか多くの保証を与えられること

となろう」(ibid.)。ロックは、西インドからの金属の流入により、金銭の価値が減少したとするのだが(9)、フーコーによれば、「ここで語られている金属価値の低下は、金属に固有のものとして所属する何らかの貴重性ではなく、金属のもつ一般的表象能力の問題である。貨幣の総量と商品の総量は対をなしており、両者は必然的に対応するものと考えなければならない」(ibid.)。フーコーによれば、貨幣の価値は、貨幣と商品との全体的な関係――全体的な表象関係――の中で決まってくると考えられるようになったのである。商品のうちに「どれだけの量の貨幣を価格とすべきかを、何らかの内在的特徴によって示すものは何一つない」のである(MC, 197, J, 206)。〔ロック(9), モンテスキュー(10), グラスラン〕

時間の関与

さて、フーコーはこの諸価格（＝諸表象）の体系に時間的要素が入ってくることを指摘する。貨幣を介した交換などの富を巡る活動は時間の中で行われるからである。「貨幣は、よりすみやかに流通することによってのみより多数の富を表象する。(…) 流通の速度は、出発点にもどるまでに通過する所有者の数によって規定される（だからこそ、収穫物に関する農業への支払いが基点として選ばれるのだ。そこには絶対的に確実な一年ごとのサイクルがある)」(MC, 198, J, 206–207)。

「さまざまな速度があり、そうした速度を可能にする貨幣量がこれに対応している。(…) 収穫量を出発点とし、一国家内に居住する個人の数を考慮することによって、貨幣がすべての人々の手を通過し、すくなくとも各人の生活の資を表象するようになるための、必要かつ充分な貨幣量を決定することが可能となろう。(…) そのような流通状態が実現されるとき、〔事物の〕価格は内在的に「正当」とはいえぬにせよ、正確に調整されたものとなるであろう。つまり、貨幣総量の分割された諸部分 divisions が、緩すぎもきつすぎもしない分節状態で富を分析するであろう。〈表〉がよくできたことになろう」(MC, 198, J, 207)。

貨幣と人口の国際移動と政治

続く二つのパラグラフの内容は主にカンティロンによっているようだ。貨幣によらない取引も多く、また貨幣は循環するので、一国で「必要な貨幣の量は、生産の約九分の一 (…) というところであろう」(MC, 198–199, J, 207–208)。〔カンティロン Cantillon(11)〕

フーコーはカンティロンを解釈しつつ続ける。「ところで、大部分の国家は互いに貿易をおこなう。(…) (貨幣量が少ないため) 価格が比較的低廉な国では、購買の大きな可能性によって外貨が惹きよせられ、金属量は増大する。国家はよく言われるように「富強」となる (…)。けれども、正貨流通量の増大は、個人に価格の安い外国から買入れをおこなう能力を与える一方、価格の上昇を招かずにはおかない。こうして、国内の金属はしだいに減少し、国家はふたたび貧困に陥る」(MC, 199–200, J, 208)。〔カンティロン(12)〕

フーコーは他の論者を援用し、カンティロンを超えて考察を進める。今みた貧困化への傾向にもかかわらず、「事物の秩序のなかに、反対の傾向が実在」しているために、こうした変動

は、結局、回避されよう。「通貨は、繁栄した国家から価格の安い地域へと流れるが、人間は、賃金の高いところ、つまり、通貨の豊富な国々へと惹きよせられる。したがって、貧しい国々は過疎化する傾向にあり、農業や工業が衰え、貧困が増大する。反対に富裕な国々では、労働力の流入が新たな富の開発を可能にし、その富を売ることによって金属の流通量もまたそれだけ増大する。そこで政治は、人口と通貨とのこの二つの逆の運動を調整するよう努めなければならない。製造業がつねに豊富な労働力を見いだせるためには、住民の数が、少しずつ、だが連続的に増大することが必要である。この場合には、賃金が富よりも急速に増加することも、賃金とともに価格が上昇することもなく、貿易収支は黒字を続けるであろう。(…) だが他方において、通貨の量もまたつねに少しずつ増大しなければならない。それこそが、土地や工業による生産物の価格が充分に支払われ、賃金が満足すべきものであり、住民が自らの生みだす富のなかで悲惨な状態におちいらないための、唯一の手段だからだ。そこから、外国貿易を奨励し、その差額を黒字にたもつための、すべての方策が生れるのである」(MC, 200–201, J, 208–209)。〔デュト，フォルボネ，タッカーTucker〕

したがって、「国家が繁栄するのは、(…) 正貨が、賃金をかなり高く維持しながらなお価格を上昇させぬような増加段階 (…) にあるときにほかならない。そのとき、人口は規則的に増加し、労働はつねにより多くのものを生産し、しかもその結果としての正貨の増加は（表象性の法則に従って）より多数の富のあいだで配分されるため、価格は外国のそれに比して上昇しないであろう」(MC, 201, J, 209)[13]。〔ヒューム Hume[14], フォルボネ〕

時間――貨幣による表象の内的法則

商取引は本質的に時間の中で成立する。したがって、貨幣のもつ「記号と表象のはたらき」には「時間的指標」が付加される。「この〔時間の〕指標は、秩序に関する理論の他のどんな分野にも見いだされない。実際、(…) この〔富を表象する貨幣の〕能力はつねに時間によって内側から変様させられる。(…) 貨幣の場合には、時間は、表象を律する内的法則に属し、この法則と一体をなしている」(MC, 201–202, J, 210)。貨幣の分析は、表象作用に「『微分 différentielles』――つまり増加および減少への傾向」(ibid.) を見いだすとされるのである。

フーコーはさらに続ける、「富におけるこの時間の機能が現れたのが、貨幣が担保として規定され信用と同一視されてすぐ（それは十七世紀末のことだ）であったのは必然的である。なぜなら、この時期に、貨幣という信用状の通用期間、それがふたたび事物にかわる際の速度、それが一定の期間内に通過する所特者の数〔＝速度、cf. p. 8〕が、貨幣の表象能力を特徴づける可変要素となったからだ。(…) 貨幣による価格 prix monétaire は、さまざまな富を、それらの増加あるいは減少の〔時間的〕運動において指示〔表象〕するのである。」(MC, 202, J, 210–211)

５．価値の形成

価値の形成の場へ

ここまでに見た「貨幣と商業の理論」に対して、フーコーが第五節で検討する「価値の理論」は、交換についての「根本的」な問いかけを行う（MC, 203, J, 211）。そうはいうものの、交換において価値自体が生じる場面は、むしろ第六節において、コンディヤックら「効用主義者 utilitariste」の主張に即して、欲求、欲望との関係において検討される。第五節では、価値と交換の問題圏全体が素描され、次いで、事物のもつ価値の生じる外的条件が考察される。まず、フーコーにしたがって、価値と交換の問題圏を見ておこう。やや晦渋なくだりだが引用しよう（引用中の符号、番号は便宜的に筆者が追加した）。

「古典主義時代の思考にとって、価値をもつ valoir とは、まず、何ものかの価値をもつこと、何らかの交換過程においてその何ものかと置換されうることである。（…）ある事物が交換において他の事物を表象〔代替〕représenter できるためには、それら二つの事物がすでに価値をもって実在しなければならない。だが、価値は、表象〔代替〕作用（現実の、あるいは可能な）の内部、つまり、a. 交換あるいは b. 交換可能性の内部にしか実在しない。そこから二つの読みの可能性が同時に生じてくる。a. 一つは、価値を交換という行為それ自体、与えられるものと受けとられるものとの交点において分析するものであり、b. もう一つは、価値を、交換に先だつもの、交換がおこなわれるための本源的条件として分析するものである。この二つの読み方の a. 最初のもの〔交換（行為）における価値〕は、言語の本質をすべて 1．命題のうちにあるとする分析に照応し、b. もう一方のもの〔交換の条件としての価値〕は、言語のこの同じ本質を原初における 3．指示――行動言語あるいは語根――の側にあるとする分析に照応する」（MC, 203, J, 211–212）。

価値についての読み方が、言語にかかわる諸概念と関連させられている。言語にかかわる諸概念は、「言語の四辺形」――1．命題（あるいは帰属関係定立）、2．分節化、3．〔原初における〕指示、4．派生、の四つの作用が角に位置する四辺形――を形成するとされたことは、すでに本論文第 II 節で見た（引用中にもあるとおり、行動言語、語根は 3．指示に関連していた）。言語にかかわるこの四辺形は、「富の分析」（さらには「博物誌」）の領域にも応用できる表象の基本形式でもある、とフーコーは考えているようだ。実際、『言葉と物』に収められた「四辺形」の図には、「富の分析」（や博物誌）にかかわる諸概念も書き込まれ、目下の主題に関係するところでは、「欲求の対象」が 1．帰属関係定立（命題、動詞）に、「交換」が 2．分節化（さまざまな名）に対応させられている（p.12 の図参照）。しかしながら、『言葉と物』の本文の今検討している箇所では、実際には、a. ＜交換における価値＞が 1．命題に、b. ＜交換の条件としての価値＞が 3．指示に、対応すると示唆されており、図への書き込みと食い違いを見せている。

交換

本文では、続けて a.＜交換における価値＞の理解の仕方について、次のように補足される。「事実、a.〔交換において価値を分析する〕この最初の場合には、（…）言語のあらゆる語をそれら語の命題的結合から出発して可能にする 1. 動詞が、交換――他の行為よりも原初的な行為として、交換される諸事物の価値とそれらを譲渡する価格 prix とを基礎づける交換――に照応する」（MC, 203–204, J, 212）。二つの事物のあいだに帰属関係が肯定（定立）されるとき 1. 命題が成立するが、その肯定を行うのが 1. 動詞である（Cf. 本論文（中）p. 9–10）。その動詞が交換に対応するとされるのである。

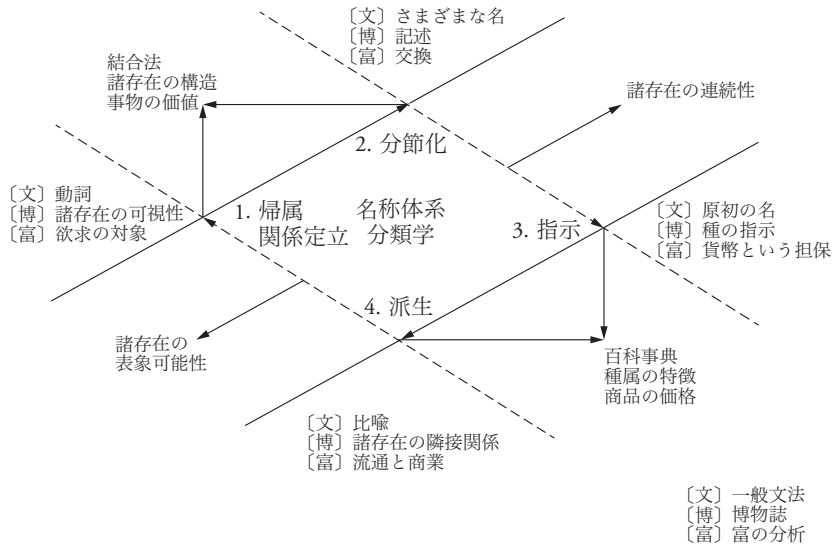
他方、図においては、交換は 2. 分節化に対応させられている。この 2. 分節化とは何なのか。名詞には、一般性をおびた名詞、つまり普通名詞があるが、それらの含意する一般性は異なる度合いをもつ。そうした種々の一般性に対応する諸個体の集合はそれぞれその広がりを異にする。分節化とは、固有名詞を含む全名詞群の中で、こうした意味合いを有する種々の普通名詞が空間的、階層的に秩序づけられることであろう（Cf. 本論文（中）p. 14–15）。命題を構成する名詞の少なくとも一方が一般性をもつ（普通名詞である）こと、言葉を換えれば、名詞群が 2. 分節されていることが、1. 命題の成立の前提となろう。ところで、1. 帰属関係定立の働きは、固有名詞も含む種々の名詞の間に新たな結合関係、2. 分節関係を作る働きでもあり、さらには、新たな一般名詞を確定させていく働きでもあるはずだ。結局、1. 動詞の働きと 2. 分節化は（図では線分で仲介されているにもかかわらず）相互に重なりあい、依存しあっているのではなかろうか。

では、この言語における関係を、富の領域に応用して考えてみよう。まず、「交換」は、2. 分節化に対応させられるが、さまざまな事物間の秩序（分節化）を前提として成立し、また事物間に新たな秩序（分節化）も結果させるであろう。一方、富の領域での 1. 動詞的な働きは、事物間の秩序を前提として、ある対象が「1. 欲求の対象」であるという肯定を生み、それによって「2. 交換」の成立にも介在するであろう。つまり、「1. 欲求の対象（の肯定）」と「2. 交換」とは、やはり相互に重なり合い、依存しあっているのではなかろうか。そこから、本文のこの箇所における、＜動詞が交換に照応する＞との見方も生まれるのではなかろうか。

交換の条件

本文では、続けて b. ＜交換の条件としての価値＞の読み方について、次のように補足される。「b.〔交換の条件として価値を分析する〕分析の他方の形態においては、〔それに照応する〕言語〔の作用〕は、それ自体の外部、いわば自然のなか、あるいは事物同士の類比のなかに根をおろしている。〔3. 指示に関連する〕語根や、〔狭義の〕言語の発生以前に〔行動言語の一部として〕語を生みだした最初の叫びが、a. 交換や欲求の相互評価より以前の、b.〔交換の条件としての〕価値の直接的形成に照応するわけだ」（MC, 204, J, 212）。とはいえ、フーコーの四辺形の図における対応関係では、基本作用としての言語における＜3. 指示、語根（原初の

十七・十八世紀



名)、叫び>には、富の分析における「貨幣という担保」が対応している。つまり、3. 指示はむしろ、前項「4. 担保と価格」で検討した<担保としての貨幣による指示>と解釈されている。ここでも、本文の記述と図にずれがあると言えよう。

フーコーは続けて、言語においては 1. 命題から出発する分析と 3. 語根（指示）から出発する分析とがはっきり「区別」されることを指摘するのだが、すぐに次のように言う。「経済の領域においては、この〔1. 命題と 3. 指示の〕区別は実在しない。なぜなら、欲望にとって、3. 対象との関係と 1. その対象が欲望をそそるものだという肯定〔命題〕とは、まったく同一のものであり、対象を 3. 指示することはすでに 1. 結合関係 lien を措定することだからだ。したがって、(…) 経済の領域にはただ一本の理論的線分があるのにすぎない」(ibid.)。こうして、欲望の対象の直接的な指示は、欲望の対象の価値を 1. 肯定することに一本化される。それに応じて、四辺形の図でも、欲望の対象との関係は 3. には現れず、<対象の価値の肯定>の形をとって、1. 命題に対応させられるのだと思われる。四辺形の図で、富の分析に関して 1. 命題に対応する箇所には、「欲求の対象」と記載されていることはすでに見た。これは、<欲求（欲望）の対象（である事物）の価値の肯定>ということを意味していることはすでに明らかである。また、本文で「ただ一本の理論的線分」とされたものは、1. 命題から 2. 分節化に向かう線分――富の分析では、1. 欲求の対象から 2. 交換へ向かう線分――のことであろう。結局、b. <交換の条件としての価値の直接的形成>の分析は、1. 命題の分析に対応させられることになろう。このように理解した上で、本論文では、以後、フーコーが掲げた四辺形の図とその説明の書き込みにしたがって論じていくこととする[(1)]。

さて、フーコーは、上の引用箇所に続けて、1. 欲求の対象から 2. 交換へ向かう線分――フーコーの四辺形の図では左上の線分――についてさらに踏み込んでいく。「この〔欲望にかかわるただ一本の〕線分は、互いに方向が反対 en sens inverse の二つの読み方を同時に許すものである。つまり、a. 一方は、価値を、1. 欲求の対象 objets du besoin ――〈有用な品物 *objets utiles*〉――相互の 2. 交換から出発して分析し、b. 他方は、価値を、後に交換がその価値を決定する définir ことになる 1. 対象 objets の形成および誕生、つまり自然の豊饒さから出発して――分析するのだ」（MC, 204, J, 212–213）。フーコーは、この二つの読み方こそ、当時の周知の二理論に対応するという。フーコーはそのまま続けている。「この二つの可能な読み方のあいだに、私たちによく知られた分岐点が認められるだろう。それこそ、a. コンディヤック、ガリアーニ、グラスランのいわゆる「心理学的理論 théorie psychologique」と、b. ケネーおよびその一派を擁する〈重農主義者 physiocrates〉の理論を分かつものだ。（…）分析のこの二つの様態のあいだには、ただ、同一の必然性の網目をたどる際に選ばれる、出発点と方向の相違があるのにすぎない」（MC, 204, J, 213）。

ここからフーコーは、まず b.〈重農主義者〉についての分析を展開することになる。

重農主義者の立場

フーコーは語る。「b.〈重農主義者〉によれば、価値や富があるためには交換が可能でなければならない。つまり、人が、処分できる状態で過剰な何ものかを所有し、ほかの人がそれを必要としなければならない。私が食欲を感じ摘みとって食べる果実は、自然が私に提供する〈財 bien〉であるが、〈富 richesse〉があるためには、私の木に私の食欲を充分に越えるだけ果実がなっていなければならない。そればかりでなく、他人が空腹を感じて果実を私に要求しなければならない。（…）ある人の要求と他の人の権利放棄があって、はじめて価値というものが出現しうるのだ」（MC, 204–205, J, 213）。重農主義者においては、このように、交換が成立しうるところにはじめて価値も成立しうることになる。次いで、フーコーは重農主義者に特徴的な、財と費用との関係から経済を分析する考え方を指摘する。

「ところで、このように〔交換の〕取引によって価値が成立する際には、それに付随してかならず財の減少が見られる。実際、取引には輸送がともなうし、運搬費、保存費、加工費、販売費がつきものである。要するに、〈財〉そのものが〈富〉に変えられるには、〈財〉の一部が消費されなければならないのだ。（…）〈重農主義者〉たちは、財の物質的実在性しか考慮に入れようとしない。その結果、交換における価値の形成は経費のかかるものとなり、既存の財からの控除として記載される。したがって、価値を形成することは、より多くの欲求をみたすことではなく、財を犠牲にしてその他の財を交換し合うことなのである」（MC, 205–206, J, 213–214）。このように、重農主義者は、価値の形成に交換が必要であることを見ていたとしても、富と価値の源泉は財とその犠牲に見ていたのである。〔ケネー Quesnay(2), メルシエ・ドゥ・ラ・リヴィエール Mercier de La Rivière, デュポン・ドゥ・ヌムール Dupont de Nemourd, サン＝ペラヴィ

Saint-Péravy〕

だが、「流通や相次ぐ交換」によって財は消費されようが、それでも財が維持される元となる「剰余 excédent」の源はどこにあるのだろうか。取引そのものが、必要な補いをもたらすことは否定される。「なぜなら、取引は、価値と価値とを、しかも可能なかぎり正確な相等性 égalité に従って、交換することを目指すからだ。(…) なるほど、ある商品を遠く離れた市場へ運べば、元の場所で交換される場合の価格より高い価格で交換されるだろう。だがこの増加分は、運搬に要した実際の費用に照応するものである。そして、その商品が運搬によって何ものも失わないとすれば、その商品と交換される停滞していた商品の方が、運搬費の分だけ値打 prix を失ったということにほかなるまい。(…) 交換のための経費は交換される財から差引かれるのだ。(…) 商取引 commerce が可能であるためには、このような過剰 pléthore がすでに実在していることが必要だったのだ」(MC, 206, J, 214)。〔サン＝ペラヴィ〕

フーコーは、「工業もまた価値の形成に要する経費を償うことはできない」とする重農主義の見方も紹介している。「価格が自由である場合には、競争によって価格が低下する傾向が生じ、(…) 製造業による価値の増加は、製造業から報酬を得る人々の〔生活のための〕消費に相当するにすぎない」。独占価格がある場合には、品物の販売価格が上昇し、企業家の利益は増加するが、この増加は他の商品の交換価値 valeur d'échange がそれだけ減少し、そこから支出が行われたのにほかならない。結局、「価値が形成され増加するのは、生産によってではなく、(…)〔誰によるにせよ〕とにかく〔財の〕消費によってなのである」(MC, 206–207, J, 214–215)。〔カンティロン(3), ケネー(4), テュルゴ Turgot(5), ミラボーMirabeau〕

「農業労働への報酬」も、農業労働者によって消費される「生活の資 subsistance と正確に合致する傾向にある」。しかし、農業の場合は、「耕作された土地が、耕作者にとって必要であるよりほかに多くの生活の資を提供する」(MC, 207, J, 216)。牧畜も含めて「農業は、生産による価値の増加が生産者の維持費に等しくない唯一の領域である。というのも、実は、どんな報酬も必要としない目に見えない生産者がいるのである。(…) そして、耕作者が労働した分だけ消費しているあいだに、そのままの労働が、〈共同生産者〉の力によって、価値の形成に要する費用がそこから差し引かれることとなるすべての財を生みだしているのだ。『農業は、神の設けたもうた製造業なのである』〔ミラボー〕」(MC, 208, J, 216)。〔デュポン・ドゥ・ヌムール，ミラボー〕

重農主義者たちは、農業労働ではなく「地代 rente foncière に理論上および実際上の重要性を与えた」が、それは、「農業労働には消費されるべきものが報酬として与えられるのに対して、地代は純生産物 produit net を表わす」からである (ibid.)。「純生産物とは、自然が労働者にもたらす生活の資と自然が自ら生産し続けるために要求する報酬〔土地の維持の資〕とのほかに、自然がさらに余分に提供する財の量である。〔交換において〕財を価値または富に変えることを可能にするのは、この収益 rente なのである」(ibid.)。さて、「労働、商取引、工業

に必要なものを供給するため、多量の通貨を準備」する必要がある。したがって、重農主義者の「経済と政治の指針」は、「耕作者の賃金を上げずに農産物の価格を上げ」、「租税を〔純生産物としての〕地代そのものから徴収」し、「工業および商業が競争によって規制され、正当な価格がぜひとも維持されるように」し、将来のよい収穫のために「大量の金銭を土地に回帰させること」となるだろう（MC, 208, J, 216–217）。

結局、自然こそが、「交換が支出や消費という犠牲をはらって価値に変える財の、うむことのない源なのである。ケネーとその弟子たちが富の分析にあたって出発点とするのは、（…）置換〔交換〕substitution の回路にはいることによって価値に転化するこの〔自然のもたらす〕過剰 superflu にほかならない」（MC, 209, J, 217）。このように、ここまでのフーコーの議論は、重農主義にまでいたる経済学史の知見を押さえつつ、彼独自の記号＝表象論との整合も図りながら、古典主義時代の富をめぐる思想のあり方を明快に私たちに提示してくれている。

6．効用主義者の立場――有用性 utilité

フーコーは、重農主義の分析を開始する際にふれていた（本論文 p. 13）「当時の周知の二理論」のもう一方、「心理学的理論」の分析に進む。ここでコンディヤックが本格的に登場する。『言葉と物』第六章「交換すること」におけるコンディヤックへの言及の検討という、本論文の主題にようやく到達したことになる。フーコーは語る。「a. コンディヤック（…）〔ら心理学的理論派＝効用主義者〕の分析は、文法における命題の理論に照応する。その分析は、交換で（…）受けとられるものを出発点に選ぶ。（…）そのものが考察されるのは、それを必要とし、それを要求する人の観点、自己の所有するものの放棄に同意して、この別のもの――より有用と見積り、より価値ありと認めるこの別のもの――を獲得しようとする人の観点からなのである。事実、〈重農主義者〉とその論敵〔心理学的理論派〕とは、同一の理論的線分を逆向き dans un sens opposé にたどるのである〔Cf. 本論文 p. 20〕。b. 一方〔重農主義者〕が、いかなる条件のもとに――どれだけの経費をかけて――財が交換体系 un système d’échanges における価値 valeur となりうるかを問うのに対して、a. 他方〔心理学的理論派〕は、いかなる条件のもとに評価の判断がこの同じ交換体系において値打 prix に転化しうるかを問うのである」（MC, 209, J, 217–218）。

ここでもフーコーは、四辺形の図の 1. 欲求の対象と 2. 交換とを結ぶ（左上の）線分を念頭に置いていよう。だが、重農主義者と効用主義者が「同一の理論的線分を逆向きにたどる」とされるが、具体的にはどの向きにたどるのか。この点は前段（本論文 p. 12–13）ですでに方向性を示し、後段（本論文 p. 20）であらためて論じるが、ここまでのフーコーの記述をまとめておこう。<1> 今検討しているくだりでは、コンディヤックらの価値の分析が「文法における 1. 命題の理論に照応する」とされている。この「1. 命題」は、「1.（動詞による）帰属関係定立」と同じことを指す。コンディヤックらの理論は、線分を 1 から発すると考えたくなる

ところである。<2> 本論文 p. 11 の引用箇所（MC, 203–204, J, 212）においては、コンディヤックらの立場に関して、「1. 動詞が交換（…）に照応する」との記述が認められた。「1. 動詞」は「1. 命題」や、「1.（動詞による）帰属関係定立」と同じ働きを指す。しかし、「1. 動詞」が「交換」に対応するように表現されていることはわかりにくかった。というのも、四辺形の図では、「1. 動詞」はあくまでも「1. 欲求の対象（の肯定）」に対応し、「交換」は「2. 分節化」と対応しているからであった。<3> 上段で最後に四辺形にふれた箇所（本論文 p. 13）では、a. コンディヤックらの分析は、「価値を、1. 欲求の対象相互の 2. 交換から出発して分析」するものだとされていた。ここに現れる「欲求の対象（の肯定）」は「1. 命題（帰属関係定立）」にかかわるが（p. 12 参照）、「2. 交換から出発」の部分をすなおに取れば、コンディヤックらの分析は、線分を 2 からたどると読める。他方、b. 重農主義者の理論については、上段で「3. 指示」に対応するとされ（p. 10 下部）、その「3. 指示」は「1. 結合関係 lien の措定」（＝帰属関係定立）と同一視されていた（p. 12）。この点からは、重農主義者こそ、線分を 1 からたどると考えてもよさそうである。

ここでは次の点を指摘しておきたい。すでに本論文 p. 11–12 で述べたように、「1. 動詞」による「1. 帰属関係定立」あるいは「1. 命題」の働きは、「2. 分節化」の働きと重なり合い、相互に依存しているということである。したがって、経済の場面でも、「1. 欲求の対象」を成立させる「1. 帰属関係定立」的な働きは、そうした対象相互に成立する「2. 交換」の働きと重なり合い、相互に依存していよう。それゆえ、コンディヤックらの所論が「2. 交換から出発」するともされ（p. 13; 本頁前段）、また、「1. 命題の理論に照応」する（p. 15）、ともされうるのであろう。〔カンティロン(1)，テュルゴ(2)〕

コンディヤック――尊重価値

さて、フーコーは効用主義者の議論の具体的な分析に移る。「交換の状況のもっとも基本的なものを想定しよう、（…）トウモロコシか麦しか持たない男と、彼に向き合う、ぶどう酒か薪（まき）しか持たない男を」（MC, 210, J, 218）。実はここでは、コンディヤックとテュルゴがそれぞれに基本的な交換の例として想定する内容がまとめて提示されている。つまり、麦とぶどう酒の交換はコンディヤックが『商業と政府』(3)で挙げる例、トウモロコシと薪の交換はテュルゴが『価値と貨幣』(4)で挙げる例なのである。フーコーは続ける。この二人の男がこれらの物品を収穫あるいは生産した際には、「彼らはその麦なり薪なりが自分たちの欲求の一つをみたしうる――それが自分たちにとって〈有用〉であろう――と判断していたのだ」（ibid.）。ここでコンディヤックの次の一節が引用されることになる。「ある事物が価値をもつということは、それが何らかの用途に適しているということ、あるいは、そのように私たちが見積る estimer ということ、である。／したがって、事物の価値は有用性、あるいは同じことだが、私たちがその事物を使用できるということにもとづいている」（コンディヤック『商業と政府』〔第一部〕第一章［CG, 10］）（ibid.）。

フーコーは続ける。「この〔ある事物が有用であるとの〕判断が、テュルゴが事物の『尊重価値 valeur estimative（原注）[5]』と呼ぶものを基礎づける。この価値は、他のいかなる品物とも比較されずに、個別に個々の品物にかかわるゆえに絶対的だが、人々の感じる欲 appétit、欲望 désirs、欲求 besoin によって変化するゆえに、相対的かつ不安定である」（ibid.）。この「尊重価値」という語について、テュルゴは次のように語っている。事物の「この価値をふさわしい名で示すために『尊重価値』と呼ぼう。というのも、実際この価値は、まさにちょうど、人間が自分の欲望のさまざまな対象に向ける尊重の度合 le degré d'estime なのだから」（*Valeurs et Monnaies*, p. 87〔『価値と貨幣』、p. 155〕）。このようにテュルゴの概念が援用されるわけだが、実際には、フーコーはコンディヤックを参照しながら議論を進めていく。〔コンディヤック，テュルゴ〕

「ところで、〔交換者双方における〕こうした最初の有用性を基盤としておこなわれる交換は、（…）それ自体において有用性を創造する。なぜならそれは、交換者の一方にとってそれまでわずかな有用性しかもたなかったものを、もう一方の交換者の評価に対して提供するのだから。この瞬間には、三つの可能性があろう」（ibid.）。フーコーはこれらの可能性をそれぞれ検討する。第一に、「コンディヤックのいう『各人の余分 surabondant de chacun』（CG, 28）――つまり、各人がそれまでに使用せず、またさしあたり使用するつもりもないもの――が、質量ともに相手の欲求に照応する場合である。つまり、（…）麦の持主の所有する余分の全体がぶどう酒の持主にとって有用と見え、同時にその逆も成り立つ場合である。この場合には、無用であったものが（…）完全に有用となるが、それは双方の側に同じだけの価値が同時に生みだされることによる。（…）このようにして生じた二つの尊重価値は自動的に等しくなる。有用性と値打 prix は残りなく照応しあう（…）」（MC, 210, J, 218–219）。コンディヤックは『商業と政府』第二章の冒頭で、このような余分な麦と余分なぶどう酒の交換の例を挙げ、この場合、交換されるもの同士には同等の「価値がある valoir」とだけ語っている（CG, 26–27）[6]。それに対してフーコーは、内容的に対応する「尊重価値」というテュルゴの概念を持ち込んで、自分の注釈を加えていることになる。なお、「各人の余分」といった記述は、コンディヤックの文章中には、指示される箇所だけでなく、その前後も含めて認められない。フーコーの勘違いであろう。

フーコーは次いで、第二の可能性に移る。「一方のもつ余分 surabondant が他方の欲求に対して不足し、他方が、自らのもつすべてを与えることを差しひかえる場合である。この場合、他方は、自分の欲求にとって不可欠な補充分を〔さらに〕第三者から獲得するため、所有物の一部分を保存するだろう。（…）この交換では、より多くのものを与える側が、自ら所有していたものの価値を低く見て損をしたというべきだろうか。決してそうではない。なぜなら、（…）彼は自分の放出するものよりも受け取るものにより多くの価値を認めているからである」（MC, 210–211, J, 219）。この部分は、『商業と政府』の続くパラグラフのわずかな記述（CG,

27）[7]に、フーコーが独自に補足を加えたものかもしれない。フーコーは、交換者は、その心理においては、「受け取るものにより多くの価値を認め」る、自分に有利な交換をする、と主張していることになる。

最後に、「第三の仮定として、だれにとっても絶対的に過剰なものは何もないということがありうる。なぜなら、二人の交換者のそれぞれは、自ら所有しているものの全体を遅かれ早かれ自分で利用できることを知っているからだ。（…）けれども、それぞれが、相手のもつ商品の一部が自らのもつ商品の一部より自分にとって有用だと見積ることもありえよう。二人は――それぞれ自分のために（…）――最小の不等性 inégalité minima を設定する。つまり、一方は、私のもっていない何桶かのトウモロコシ tant de mesures de maïs は、私の何桶かの薪より私にとって少し多くの価値があろう、と言い、他方は、ある量の薪はしかじかのトウモロコシより私にとって貴重だろう、と言う」（MC, 211, J, 219–220）。この最後の部分の二人の交換者それぞれの態度は、表現はそのままではないが、テュルゴの「価値と貨幣」の一節（p. 91）を受けていよう（ただしテュルゴは、交換者は自分のもっていないものの方を「好む préférer」とだけ言っており、「最小の不等性」を認めるという記述はない）[8]。ここでは、交換物もテュルゴの用いるものになっており、フーコーは交換を考察する際の参照項をコンディヤックからテュルゴへと移行させたように見える。フーコーは続ける。「この二つの見積られた不等性 inégalités estimatives が、彼らの一人一人に対して、自分の所有しているものと所有していないものとの相対的価値を規定する。この二つの不等性を調整するには、それらのあいだに二つの関係の相等性を設定する以外に手段はない。交換は、一方にとってのトウモロコシと薪の関係が、他方にとっての薪とトウモロコシの関係に等しくなるときおこなわれるであろう」（MC, 211, J, 220）。コンディヤックの『商業と政府』も先の部分に続く部分で、こうした第三の交換の状況と類似した状況を考察していると考えることができる（CG, 27–28）[9]。しかし、「二つの関係の相等性の設定」といった見方は、むしろテュルゴの「価値と貨幣」に見られるものであり、テュルゴの表現では、交換当事者のあいだで交換物についての「評価価値 valeur appréciative」が定まることであろう。この点を次に見てみよう。

評価価値――テュルゴ

フーコーは、上の引用に続けて言う。「尊重価値が、欲求と対象とのかかわりあいのみによって――したがって、孤立した個体のただ一つの利益 intérêt のみによって――規定されるのに対して、いまの場合に出現したような評価価値 valeur appréciative においては、『比較をおこなう二人の人間と、比較される四つの利益とがある。だが、二人の契約当事者それぞれの二つの個人的利益がそれぞれの側で別々にまず比較され、次いで、その結果がまとめて比較されて、一つの平均された尊重価値が形成されるのだ』[10]。このような関係の相等性によって、たとえば、4桶のトウモロコシと5抱え分の薪とが等しい交換価値 valeur échangeable をもつと言うことが可能となろう。（…）〔結局、〕どちらの側も（…）自分の所持していた以上の価値を

獲得することになる」（MC, 211, J, 220）。ここでフーコーが引用しているのは、テュルゴ「価値と貨幣」中の「評価価値」を説明するくだりである。「契約当事者それぞれの二つの個人的利益」とは、＜現に持っている対象と、持ちたいと思う対象に付与する二つの利益＞ないしは二つの「尊重価値」のことである。また、双方の間で合意されることになる「平均された尊重価値」は、テュルゴにおいて、「交換〔可能〕価値 valeur échangeable」であり、「評価価値」とも呼ばれるのである。

上段では、コンディヤックもこうした第三の交換の状況に類似した状況を考察していると述べたが、彼は「評価価値」に相等するものに、「値打 prix」（CG, 28）という用語を与えている。コンディヤックにおいて、交換と関連して使われるこの prix という用語のニュアンスは、他のものとの比較における価値、つまり相対的価値、しかも交換のなかで当事者によって合意された価値、といったもののようだ（Cf. CG, 29）。ただし、フーコーには、明確な用語が望ましかったであろう。テュルゴの「評価価値」という用語を使用することで、交換の場面ではもっぱら「価値 valeur」という語を用いることができ、他方で、prix という語は、貨幣によって表示される「価格」の意味に限定して用いられることになる。〔コンディヤック, テュルゴ(11)〕

さて、フーコーは交換と価値の関係のまとめに入る。彼によれば、「交換もまた価値を創りだす。そしてそれには二通りの仕方がある。1. まず交換は、交換なしには有用性をわずかしかもたぬか、まったくもたないかもしれない事物を有用なものとする。（…）2. 他方、交換は、新たなタイプの価値、つまり『評価〔を示す〕appréciative』価値を生じさせる。つまり交換は、有用性同士のあいだに相互的関係を組織し、その関係が、単なる欲求への関係を二重化する。また、とくに単なる欲求への関係を変様させる。というのも、評価の秩序、したがって、それぞれの価値がすべての価値と比較される秩序においては、わずかでも有用性が新たに生みだされれば、既存の有用性の価値を相対的に減少させるからである。いろいろな欲求をみたしうる新たな品々が出現しても、富の総計が増加するわけではない」（MC, 212, J, 220–221）。こうして、価値は単に欲求と関係するだけでなく、価値相互の関係の中に置かれるようになる。また、有用性は人々が「その事物を使用できる」（本論文 p. 16下部）ところに成立するのだから、その総量にはおのずと限界があろう。また、重農主義的視点からしても、すぐ先でもふれられるように「あらゆる富は土地から生じ」るのだから、富の総計はゆるやかにしか変化しないであろう。フーコーは続ける。「こうしたわけで、交換は、1. 価値を増加させる（すくなくとも間接的に欲求をみたす新たな有用性を出現させることによって）とともに、2. 他方では価値を減少させる（それぞれの価値の評価に際し、ある価値を他の価値との〔相対的〕関係において）ものでもある。交換によって、1. 有用ならざるものが有用になる反面、それと同じ比率で、2. より有用なものが〔相対的に〕有用性を減ずるのである」（MC, 212, J, 220–221）。

以上、フーコーは効用主義の検討を、尊重価値と評価価値というテュルゴによって提起された概念を手がかりに行ってきたことになる。もとよりコンディヤックらの時代においても、実

際の交換は、担保としての能力をもつ貨幣を介した大小さまざまな規模での取引として行われる。しかし、ここで考察されたような交換相手との閉じられた関係における交換は、効用主義者たちの価値論、価値形成論の原型を提示するものであっただろう。ところで、本論文（中）で検討した『言葉と物』第四章「語ること」はコンディヤックを異論の余地のない第一の参照項にしていたが、第六章「交換すること」全体にはそうした優越的な参照項は存在しない。また、ここまでに見た価値論における第一の参照項も、コンディヤックよりもむしろテュルゴであった。〔グラスラン、ヒューム(12)〕

効用主義と重農主義

さて、フーコーは、テュルゴ、コンディヤックらの効用主義と先に検討した重農主義との関係へと進む。フーコーは語る。「いまや、〈重農主義者〉とその論敵とにおいて、理論的要素が同一であることが納得されるであろう。（…）つまり、あらゆる富は土地から生じ、事物の価値は交換と関係があり、貨幣は流通状態にある富の表象として価値をもつ、（…）とされているのだ。けれども、こうした理論的線分の向きが、〈重農主義者〉と「効用主義者」では逆なのである。（…）a. コンディヤック（…）〔ら〕は、有用性相互の 2. 交換――あらゆる価値の主観的で積極的な基盤としての交換――から出発する。したがって、欲求をみたすすべてが価値をもち、より多く欲求をみたすための加工や運搬は、いずれも価値の増加となる。そして、この増加こそ、労働者の生活の糧に相当するものをその増加分から引いて労働者に報酬として与えることを可能にするのだ」(MC, 212–213, J, 221)。ここでコンディヤックらは「2. 交換から出発する」とされている。この「2. 交換」に「主観」性が関与するとされること(13)、有用性の増加が価値の増加であり、それが労働者の報酬の元となることも確認される。フーコーは続ける。「しかし、価値を構成するこれらすべてのプラスの要素は、人間たちが何らかの欲求を感じる状態にあること、すなわち、自然の多産性の有限な性格、にもとづいている」(MC, 213, J, 221–222)。「欲求 besoin」という言葉は「必要」に通じる。人間が必要、欲求をつねに感じるのは、ある意味で自然が有限な性格をもっているからであるとされる。

フーコーはさらに続ける。「b.〈重農主義者〉にとっては、この同じ系列が逆向きにたどられなければならない。つまり、土地からの生産物のあらゆる変形や加工に対しては、労働者の生活の資という報酬を与えなければならず、それゆえ変形や加工の分だけ財の総計は減少する。価値は消費がおこなわれるところにだけ生じるのだ。だから、価値が出現するためには、自然が際限のない多産性を授けられていなければならない」(MC, 213, J, 222)。効用主義者においては、人間の欲求に比してむしろ過少であると見なされた自然の多産性が、重農主義者においては、むしろその積極面において評価されるという。フーコーにしたがって両者の関係を見よう。

「a.「効用主義者」は、事物に何らかの価値を与える 1. 帰属関係定立を、2. 諸交換の〈2. 分節化〉l'*articulation* des échanges にもとづける。b.〈重農主義者〉は、諸価値の漸次的〈2. 裁

断 découpage〉〔分節化〕を富〔1. 欲求の対象として肯定されるもの〕の〈実在〉によって説明する。だがそのいずれにおいても、価値の理論が、(…)〈1. 帰属関係定立〉の契機と〈2. 分節化〉の契機とを結びつけていることにかわりはない」(ibid.)。すでに見たように、「2. 交換」は、さまざまな事物間の分節化を前提として成立し、また新たな分節化も結果させるであろう（本論文 p. 11)。効用主義の考え方では、この 2. 交換＝分節化の過程を基に、1. 帰属関係定立に当たる＜事物への価値の付与＞がなされると考えられる。この＜事物への価値の付与＞は、図では「欲求の対象」と表記されているが、これが＜欲求の対象となる事物の肯定、すなわちその事物への価値の付与＞を表していることはもはや明らかであろう。一方、重農主義者の考え方では、1. 富が実在するがゆえに、2. 諸価値の裁断（＝分節化＝交換）も可能となろう。そして、考え方の方向は逆であるが、1. 帰属関係定立と 2. 分節化とが関係するところに価値の理論が成立することは変わらない、とされている。フーコーの「〜を〜にもとづける fonder … sur …」、「〜を〜によって説明する expliquer … par …」といった表現と、線分をたどる方向との関係は必ずしも明確ではないが、本論文では、基になるもの、説明原理になるものから線分をたどり始めると理解したい。先の引用箇所（p. 20）で「〔コンディヤックらが〕有用性相互の 2. 交換から出発する」とされていることも、こうした理解をうながす。結局、効用主義者は線分を 2 から 1 へとたどり、重農主義者は線分を 1 から 2 へとたどることになろう。

以上で、フーコーが富の分析の分野でのコンディヤックについて直接論じた部分の検討の検討は終える。第六章は富の分析の歴史的変遷にも多くの部分を割いたため、章の中でコンディヤックの占める位置は大きくはなかった。しかし、フーコーは、コンディヤックをテュルゴとともに効用主義の代表者とみなし、この時代の富の分析の一つの重要な構成要素として分析した。結局、コンディヤックはこの時代の表象論、言語理論の代表的理論家であり、富の分析の分野でも著作を残したため、フーコーにとっては、まさに古典主義時代を体現する思想家となったのである。

7．全体的な表

さて、第七節「全体的な表」で、フーコーはこれまでにたびたびふれた古典主義時代の知の四辺形についての総合的な考察へと向かう。関連して「富の分析」についてもさらに言及されるが、それを検討することは、本論文でのこれまでの考察を補足、発展させることにもなろう。また、この四辺形についての考察はフーコーが次代（狭義の近代）の思考をどうとらえているかにもかかわり、これを検討することは『言葉と物』の全体的な理解にも資するであろう。よって続けて検討したい。なお、フーコーの展開には、第五章「分類すること」での「博物誌」にかかわる考察の成果も折り込まれるが、本論文で扱っていないこうした記述は原則的

に省いて検討する。

尊重価値と評価価値――四辺形の左上の辺

フーコーは、「いまや経験的諸秩序の全体的組織を描きだす」ことができるとする。富の分析も、一般文法（や博物誌）と「同一の布置」に従っていよう。「事実、価値の理論が（〔効用主義者にあっては〕欠乏や欲求によって、あるいは〔重農主義者にあっては〕自然の豊饒さによって）説明するのは次のことだ。つまり、(…)〔交換者の一方の〕事物についての見積りがどのようにして〔他方の〕事物についての見積りに相等関係（A と B は同一の価値をもつ）あるいは類比関係（私の相手の所有する A の価値は、私の欲求にとって、私の所有する B が相手にとってもつ価値と同じである）によって結合されうるか、ということだ。」(MC, 214, J, 223)。ここでフーコーが「相等関係」とするものは、先に（p. 17）コンディヤックらに関連して見た、交換の第一の可能性（尊重価値の相等性）に対応し、「類比関係」とするものは、同じく、交換の第二、そしてとりわけ第三の可能性（関係の相等性、評価価値の相等性）に対応しているように思われる。フーコーは、重農主義者が実際の交換の場面をどうとらえたかについては特にふれてこなかったが、ここでも結局、重農主義者については語っていない。フーコーは続ける。「したがって価値は、〈一般文法〉にあって動詞によって保証され、命題を出現させることで言語のはじまる本源的境界を構成する 1. 帰属関係定立の機能に照応する」(ibid.)。ここでフーコーが語る「価値」とはまずは「尊重価値 valeur estimative」であろう。本論文の上段（p. 12）では、富の領域において 1. 動詞的な働き（帰属関係定立の働き）は、まず、ある対象が「1. 欲求の対象」であるという肯定を生むであろうことを確認した。この帰属関係定立の働きはさらに、より具体的な尊重価値の決定にまで及ぶとも考えられよう。次いで、「評価価値 valeur appréciative」も、テュルゴが提示した、交換相手との一対一の合意によって定まる、物品が交換されるための価値（本論文 p. 18）としては、帰属関係定立の働きによって決定されると考えられよう。しかし、フーコーはさらに続ける。

「しかし、評価価値が見積りの価値 valeur d'estimation となるとき(1)、つまり、評価価値があらゆる可能な交換によって構成される体系 le système の内部において規定され限定されるとき、個々の価値は他のすべての価値によって認定され裁断される découpée。つまり、この瞬間から、価値というものは、〈一般文法〉が命題中の動詞以外の要素（名詞、および、顕示的もしくは潜在的に名詞的機能をもつそれぞれの語）に認めた、2. 分節化の役割を演じることとなる」(MC, 214–215, J, 223)。「評価価値」は交換の相手とのあいだで「関係の相等性」(p. 18) を目指すものであり、すでに人は、直接的な欲求を離れて、事物の価値を関係のなかでとらえることを始めていよう。その上で、ここで「見積りの価値」とは、「可能な交換によって構成される体系」のなかで決定される価値であると読める。つまり、「評価価値が見積りの価値になる」とは、相手との交換のための価値にかかわる合意が、より広い交換の体系、あるいは価値の体系の内部において決まってくる、ほどの意味であろう。評価価値がすでに事

物の価値を関係のなかでとらえることを始めていたのなら、評価価値は、体系によって決定される価値への端緒となっていると考えることもできよう。また、フーコーはふれないが、貨幣が物品の担保として使われる場合にこそ、「あらゆる可能な交換によって構成される体系」は発展すると考えられるかもしれない。結局、フーコーによれば、すべての価値は体系、つまりは裁断＝分節化された集合に属することになろう。また、価値は分節化の原理となって、体系を更新することだろう。

フーコーは、今見た 1. 帰属関係定立と 2. 分節化の二つの働きを、価値の観点からまとめる。「交換体系 le système des échanges において、つまり、富の各部分に、他の諸部分の記号となったり、逆にそれらを自らの記号としたりすることを可能にする仕組みにおいて、価値は、1.〈動詞〉であるとともに 2.〈名詞〉であり、1. 結合力であるとともに 2. 分析の原理であり、1. 帰属関係定立であるとともに 2. 裁断である。(…)〈価値〉は、ただ一つの操作のうちに二つの機能を結合させている。つまり、一つは、記号を別の記号、表象を別の表象に 1. 帰属させることを可能にする機能であり、もう一つは、諸表象の総体を構成する諸要素を、あるいはそうした総体を分解する諸記号を 2. 分節化することを可能にする機能である」(MC, 215, J, 223)。こうしてフーコーは、富をめぐる人間の活動において、価値の形成は、1. 欲求の対象の肯定、および交換におけるその価値の決定と、交換を通したさまざまな対象の 2. 分節化として、つまり四辺形の左上の辺において行われると考えるのである。すぐ前のパラグラフで見たところからは、交換における対象の価値の決定は、1. 帰属関係定立に照応する働きから、2. 分節化に対応する働きへと比重を移していくとも考えられよう。このことは、本論文の上段（p. 11–12）において、「2. 交換」関係を 2. 分節化として理解したことにも通じよう。そして、フーコーは、効用主義者がこのようなものとしての「2. 諸交換の分節化」(p. 20–21）から出発していると見なしているように思われる。

貨幣と商業――四辺形の右下の辺

フーコーは次いで、先に第四節「担保と価格」で考察された、貨幣と価格をめぐる人間の活動を、四辺形の右下の辺に対応させて総括的に再検討することになる。関係する理論は、「貨幣と商業の理論」、「貨幣の値打 prix に関する理論」と呼ばれている。フーコーは次のように語る（以下の引用文に加えた番号は、四辺形の図の働きにふった番号と一致している）。

「貨幣と商業の理論が説明するのは、まず、3. 任意の物質〔貨幣〕が、ある対象と関係づけられその永続的記号となることによって、どのように記号をなす〔示す〕signifiant 機能をもちうるか、である。4. 次いで、この理論が（商業の働き jeu、通貨増減の働きを援用して）説明するのは、記号と記号によって示されるものとのこうした関係が決して消滅することなく、どのように変質しうるのか、同一の貨幣要素がどのように異なった量の富の記号でありうるのか、この要素がどのように自らの表象すべき諸価値との関係においてすべりを起こし、広がり、あるいは収縮するのか、である」(MC, 215, J, 224)。ここでは担保という言葉は使われて

いないが、語られているのは第四節で検討された内容である。すなわち、まず、3. 貨幣が記号として対象を指示（表象）すること、具体的には、一定の貨幣要素が何らかの量の富の記号となること、その富に価格を付与すること、である。次いで、4. 商業や通貨増減の働き――つまり商品あるいは貨幣の量の変動――に応じて、一定の貨幣要素に対応する富の量――つまり富の価格――が可変的であること、である。こうして、四辺形の図の「富の分析」にかかわる注記にある、3.「貨幣という担保」の設定と 4.「流通（＝通貨増減）と商業」の仕組みとの関係――四辺形の右下の辺――において、富を指示する貨幣の能力とその可変性とが生じると考えられているのである。フーコーは続ける。「したがって、貨幣の値打に関する理論は、3.〈一般文法〉において語根や行動言語の分析という形態であらわれるもの（〈指示〉機能）、および、4. 比喩や意味のすべりという形態であらわれるもの（〈派生〉機能）、に照応する。3. 貨幣は語と同様、何ものかを指示する役割をもつが、たえずこの 3. 垂直な軸のまわりで 4. 振動しつづける。つまり、4. 価格の変化は、3. 金属と富とのあいだの最初の関係の設定に対して、修辞学的移動が言語記号の原初の意味に対して占めるのと同じ位置を占めるのだ」(ibid.)。

「だが、そればかりではない Mais il y a plus」――とフーコーはさらに展開する――「貨幣は、自らのもつ固有の可能性にもとづいて、3. さまざまな富を指示し、さまざまな価格を決定し、4. さまざまな名目的価値を変化させ、さまざまな国家に貧困あるいは富裕をもたらすが(2)、そうすることで（…）貨幣は 3. さまざまな富にそれぞれ個別的な標識を与え、それと同時に、4. それらの富に対して、諸事物と自由になる諸記号との総体によって現に規定されている空間内での場所、おそらくは一時的な場所を指定するのである」(ibid.)。ここでは、「諸事物と（…）諸記号の総体」との関係で、さまざまな富の指示の位置関係――あるいはさらにそれらのすべり（価格の変動）――を考える必要があると言っているのであろう。

フーコーは、貨幣記号の諸体系が成立し利用される中でこそ、富の分野における四つの機能が作動し、富の秩序も成立すると考えているようだ。フーコーは語っている。「四つの機能が、言語記号をその独異な諸特性において規定している。（…）これら四つの機能は、（…）貨幣記号 signes monétaires の実際的利用のうちにもまた見いだされる。富の秩序（…）が立てられ、その姿をあらわすのは、欲求の諸対象のあいだ（…）に人が〔貨幣〕記号の諸体系 des systems de signes を設定し、この諸体系によって、〔四つの作用、すなわち〕諸表象相互の 3. 指示作用、シニフィアンとなる表象のシニフィエとなる表象との関係における 4. 派生、表象されるものの 2. 分節化、ある種の表象と他のある種の表象とのあいだの 1. 帰属関係定立が可能となるかぎりにおいてである。この意味において、古典主義時代の思考にとっては、（…）貨幣ないし商業の諸理論は、言語そのものと同じ可能性の諸条件を有しているといえよう」(MC, 216, J, 224–225)。「欲求の諸対象のあいだ（…）に人が〔貨幣〕記号の諸体系を設定」するとあるが、本論文第 4 項で見た貨幣論の局面においてすでに「諸価格の体系」(p. 7) が語られていた。

このように「〔貨幣〕記号の諸体系」は、直接には図の右下 3–4 の辺に対応しているが、結局、富の分野における四つの作用すべてが、この諸体系を前提として展開するとされているように思われる。実際、フーコーが具体的にふれているわけではないが、貨幣が「3. さまざまな富に個別的な標識を与える」働きは、前段で見たような「2. 分節化」としての「2. 交換」の働きと密接に関連し、さらには「1. 帰属関係定立」の働きとも関連していよう。フーコーがこれらの概念で展開したことは、貨幣や価値について私たち自身で考察を進める際にも参考になろう。

*　　*　　*

古典主義時代の知の四辺形

さて、フーコーは続いて古典主義時代の知の形の総括的検討に向かう。まず、言語が特権的記号体系であることが確認される。「事物の秩序を明らかにするという点で、語は充分に特権的な一つの記号体系を形成しており、(…) 貨幣はよく調整された場合にのみ、言語と似た機能をはたしうるのだ。(…)〔貨幣を含む〕諸記号、とりわけ語は、(…) 事物の秩序を成立させ、それを明瞭なかたちで顕示するのである」(MC, 216, J, 225)。次いで、フーコーは言語記号の領域と、富の領域の違いへと進む。まず、言語の四つの契機が再検討される。

「動詞の出現によって言語の実在がはじまる瞬間から、〔命題、分節化、指示、派生という、言語の〕四つの契機は互いに他を要求する (…)。しかし、諸言語の現実の生成においては、〔これらの契機のあいだにおける〕移行 parcours は、同じ方向におこなわれるわけでも、同じ厳密さをもっておこなわれるわけでもない。原初における 3 指示名称から出発して、人間の想像は（自分たちの生活する風土、生活条件、感情や情念、自分たちのする経験に従って）さまざまな 4 派生を生じさせ、そうした派生は (…) おそらくは諸言語の多様性や、それぞれの言語のかなり不安定な性格をも説明する。こうした 4 派生の一定の瞬間において、そしてまた一つの個別的言語の内部において、人々は、2 互いに分節しつつ表象を裁断する語ないし名の一総体を所有している。けれども、こうした〔既存の語ないし名による〕分析はきわめて不完全であり、不明確さや重複がきわめて教多く残るので、人々は、同一の表象に対して、さまざまな語を用いたり異なった 1 命題を立てたりするであろう。彼らの反省は誤謬をまぬがれないのだ。こうして、3 指示と 4 派生のあいだに想像によるすべりが増殖する。2 分節化と 1 帰属関係定立のあいだに反省の誤謬が増殖する」(MC, 216–217, J, 225)。「4 派生の一定の瞬間において、(…) 人々は、2 互いに分節しつつ表象を裁断する語ないし名の一総体を所有している」――この点について補足すれば、起源において固有の名であったものが、現実の歴史における 4. 意味の派生の過程で、一般化（普通名詞化）されていく（本論文（中）p. 25, 28）(3)。この名詞の一般性はまた、名詞群が 2. 分節されるなかで獲得される、ともされるが（本論文（中）p. 14）、こちらは、一般性をもった名詞が名詞群のなかで適宜場所を得て

いくという、形式的な側面に注目しているのではなかろうか。なお、個々の 1. 帰属関係の定立は、こうした一般性をもった名詞を前提として成立しつつ、名詞間の 2. 分節関係を更新もしていくであろう（本論文（下）p. 23）。

さて、引用では、日常の言語が不安定で誤謬を含むとされた。ここから、人々はまず、語の「表象的価値」が明確な根拠をもった「普遍的言語」を構想することになる。この「完全に判明な言語」においては、「すみずみまで明瞭な〔真なる〕言説」が可能になるであろう (MC, 217, J, 225–226)。言説一般の形式は 1. 帰属関係定立と 2. 分節化の働きが関与しあうところに成立するであろうが、この「明瞭な言説」は「それ自体 1–2 結合法 Ars combinatoria」――代数学がその一種である記号間の関連づけの技術――となろう（四辺形の図を参照のこと）。フーコーは続ける。「また、同じ理由」――すなわち不安定で誤謬を含むこと――「から、現実のあらゆる言語の使用は、一個の〈百科事典〉によって裏打ちされ doublé なければならない。この〈百科事典〉は、語のたどる道筋を規定し、もっとも自然な道を指定し、知の正当なさまざまなすべりを浮き立たせ dessiner、さまざまな隣接や類似の関係を法典のごとく規定する codifier」(MC, 217, J, 226)。百科事典は現実にも存在したが、ここで〈百科事典〉は、「現実の言語の使用」の「自然」で「正当」な成果を「裏打ち」する――跡づけ、確定する――ものではなかろうか。それはまた、現実の、日常の言語の自然で正当な使用法の模範として働きもしよう。結局、「〈辞典〉が作られるのは、語の最初の 3 指示作用にもとづいて 4 派生の働き jeu des dérivations を制御するためである。(…)〔他方、〕〈普遍的言語〉が作られるのは、2 分節化をうまく設定することで、反省が判断を下す際の誤謬を抑制するためである。〈結合法〉と〈百科事典〉は、現実の諸言語の不完全性をはさんで呼応しあうのである」(ibid.)。このように長い迂路をとって言語の補足的検討をした後、フーコーは富の分析へと戻る。

「〔他方、〕(…) 富の流通が人間によって設けられ制御される制度である以上、それは、自然発生的言語に内在する上のような危険〔3–4 すべりと 1–2 誤謬〕を避けなければならない」(MC, 217, J, 226)。続く部分はわかりにくいが、あらかじめ補足しておけば、すべりや誤謬が生まれる作用域をフーコーは「開かれて」いると形容する。また、言語に関してこうした作用を「調整」・制御していこうとする「技術の企て」が、今し方ふれた〈結合法〉と〈百科事典〉であることになろう。フーコーは言う。「言語においては開かれたままであって〔すべりと誤謬を生じさせ〕、〔それを閉ざすために、〕本質的に未完成にとどまるさまざまな技術の企てを言語の限界に生じさせるもの〔、そうした作用域［1–2, 3–4］がある〕。(…)〔富の領域においては〕1–2 価値は尊重価値から評価価値へと自動的に変化し、貨幣はその量の増減によってつねに 3–4 価格の変動を招きかつこの変動を制限しているのだが、この二者〔価値と貨幣〕が、富の領域において、1–2 帰属関係定立と分節化の調整 ajustement、3–4 指示と派生の調整を保証している。言語においては開いたままである〔二本の〕線分〔で示される作用域〕を、1–2 価値と 3–4 価格が実際的に閉ざしているのだ。(…) 1–2 価値はさまざまな富をた

がいに結合し、3−4 貨幣はそれらの富の現実の交換を可能にする。（…）富の秩序は、（…）価値と貨幣の実在という、単純な事実のうちに顕示されるのだ」（MC, 218, J, 226）。1−2 価値にかかわる線分（四辺形の左上の辺）には、交換の場面で、交換する事物について当事者が行う判断が対応している（Cf. p. 16以降）。一方、3−4 貨幣ないし価格の線分（右下の辺）には、現実の貨幣社会において、貨幣記号によってさまざまな財を 3. 指示し、4. その貨幣と財を流動状態に置く社会的活動が対応していると言えよう。そして、3−4 貨幣が「現実の 1−2 交換を可能にする」とされ、二つの辺が関連づけられたことになる。フーコーは続ける。

「とはいえ、（…）1−2 尊重価値が評価価値となるには一つの変換が必要であり、3−4 金属と商品との最初の関係が可変的価格となるには漸次的変化が必要である。（…）富の領域では、事物の本性と人間の活動とに結びついた一つの移行 passage が問題となる」（MC, 218, J, 226–227）。四辺形の図において、第 4 の基本的作用としての 4. 派生は、富の分析については「4. 流通と商業」とされている。貨幣による個別の財の 3. 指示と、貨幣と財にかかわる「4. 流通と商業」の運動との相互作用の中で、可変的である価格が一つの値を取るよう決定されていくのであろう。フーコーは、言語と富についてのここまでの比較を次のように締めくくっている。「言語の場合には、記号体系は不完全なまま受動的に受容されており、〔結合法や百科事典という〕ある種の技術のみがこの体系に修正を加えることができる。そのため言語の理論はただちに処方的様相をおびる。（…）富は、人間によって生産され、増やされ、変様させられる記号である。だから富の理論は一貫して何らかの政策 une politique に結びつく」（MC, 218, J, 227）。富は完全に人間活動に依存する記号であるゆえに、その活動に介入してそれを操作しようとする「政策」と富の理論は相互依存の関係に入るのであろう。

四辺形の開かれた二辺

さて、フーコーは、古典主義時代の四辺形の図において破線で表されている二辺［2−3, 4−1］についての分析に入る。フーコーは次のように問う。「しかし、基本的四辺形の他の二辺［2−3, 4−1］は開かれたままである。（単独の、一時的・具体的な行為である）3. 指示作用が、いかにして自然、富、表象の 2. 分節化を可能にしうるのだろうか。一般的に言って、相対する二本の線分（言語における 1−2 判断の線分と 3−4 意味の線分(4)、（…）富の理論における 1−2 価値の線分と 3−4 価格の線分）はいかにして互いに関係づけられ、言語、（…）富の不断の動きを可能にするのだろうか」（MC, 218–219, J, 227）。フーコーは次のように答える。「このことを説明するには、諸表象は互いに類似し、想像の作用のもとで互いに他を想起させ、（…）人間の欲求は互いに照応し合い、満たし合うと想定しなければならない。言語がありうるため、（…）富と富に関する実践とがありうるためには、諸表象の連鎖、（…）自然の強大な生産力が、つねに要求されるのだ。0. 表象および存在の連続体、無の不在として消極的に規定された存在論、存在一般の表象可能性、表象の現前による存在の顕現――こうしたすべては、古典主義時代の〈エピステーメー〉の全体的布置の一部をなしている。0. このような連

続性の原理のうちに、十七、十八世紀の思考の形而上学的に強い契機 moment を認めることができるであろう（このことが、1−2 命題という形式が実際に 3−4 意味をもち、(…) 事物の 1−2 価値が 3−4 価格として計算されることを可能にするのだ)」(MC, 219, J, 227)。

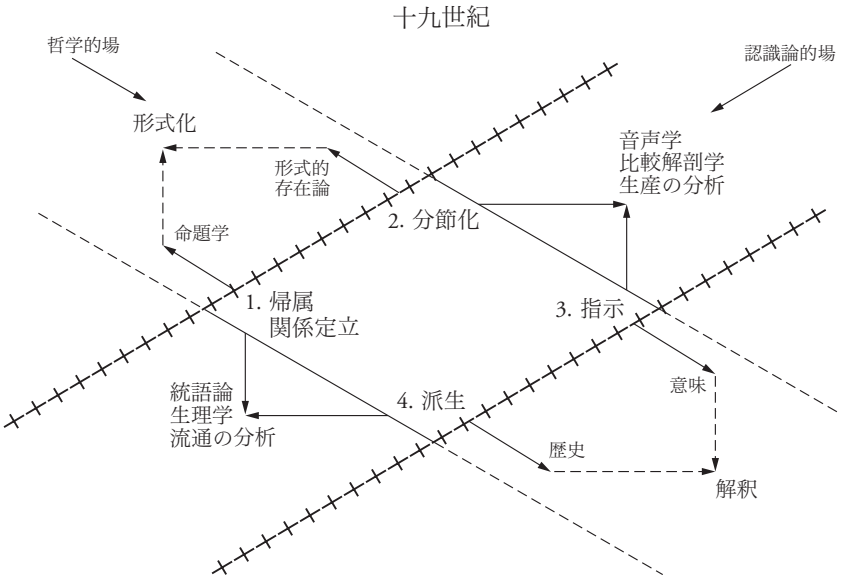
この破線で示される「開かれたまま」の二辺［2−3, 4−1］は＜形而上学的契機＞とされているものであり、他方の実線で示される二辺［1−2, 3−4］の相互の関係とも言える。この「開かれたまま」の二辺は、人間の実際の活動の中で閉じられる――調整される――のではない。しかし、形而上学的な連続体、あるいは無を排除した――充実した――存在が「想定」されて、その連続性の上に成立することから、この二辺は、閉じられている――調整されている――と見なされうるのであろう。しかし、「開かれたまま」の二辺で示される関係についてのフーコーの説明は簡潔、抽象的にすぎ、私たちの関心に十分説得的に答えているとは言えなかろう。なお、他方の実線の二辺［1−2, 3−4］は、経済分野では、人間の実際の経済活動の中で閉じられた形で――調整されて――成立する（上段 p. 26–27 参照)。この二辺は、言語においては、当初開かれているが、人間の手で調整され、閉じられることになる（上段 p. 26参照)。

さて、フーコーによれば、この実線の二辺［1−2, 3−4］は、また、時代の科学的な主題ともなるであろう。「2 分節化と 1 帰属関係定立、3 指示と 4 派生のあいだの関係（これが、一方で 1−2 判断、他方で 3−4 意味を基礎づけ、(…)〔また、一方で〕1−2 価値を、〔他方で〕3−4 価格を基礎づける）は、この同じ時代の思考に対して科学的に強い契機 moment scientifiquement fort を規定している（これが、文法、(…) 富に関する科学 science を可能にするのだ)」(MC, 219, J, 227–228)。「科学」と訳す原語は science であり、＜一定の方法のもとに対象を認識する活動とその成果＞程度の意味で使われていよう[(5)]。ここでふれられる、表象に関連する四作用間の二組の関係［1−2, 3−4］は、人間の実際の（経験的な）活動において、調整され（つまり閉じられ）たり、調整された（閉じられた）あり方で成立したりするが、現実の客観的関係として科学の対象となりやすい、ということか。

次いでフーコーは存在論についてふれるが、これは、上に見た＜形而上学的契機の母胎となる 0. 連続性の原理としての存在論＞を受けていよう。「〔科学による〕1−2, 3−4 経験性の秩序づけは、(…) 古典主義時代の思考を特徴づける〔連続的な〕0. 存在論〔Cf. p. 27 下部〕と結びついている。事実、古典主義時代の思考は、存在が表象に対して切れ目なく与えられるという事実によって透明なものとなったある種の 0. 存在論の内部に、そもそものはじめから位置しているのだ。また、表象が存在の 0. 連続体〔p. 27〕を解き放つという事実によって照明されたある種の〔連続的な〕0. 表象の内部に、そもそものはじめから位置しているのだ」(MC, 219, J, 228)。このように「0. 連続性の原理」は、古典主義時代の思考の＜形而上学的契機＞の母胎であるにとどまらず、同じ思考の＜科学的契機＞の母胎でもあるとされている。この原理の上に、人に共有される諸表象についての対象的認識を打ち立てうる場合は＜科学的契機＞となり、それが難しい場合は＜形而上学的契機＞となるということかもしれない。

十八世紀末の変動

さて、周知のように、『言葉と物』は二部構成であり、第一部は、前提としてルネサンス時代にふれた後で、古典主義時代を主題とし、第二部は新たな時代（狭義の近代）の出現から基本的に同じ状況にある20世紀までを扱っている。今回検討している第六章「交換すること」は、第一部の最終章であるが、その第六章も末尾近くになり、フーコーは、古典主義時代の終わりを告げる知の変動について、古典主義時代の四辺形との関係において語ることになる。「十八世紀末に西欧の〈エピステーメー〉全体に生じた変動」において、「古典主義時代の〈エピステーメー〉が形而上学的に強い契機 temps をもったところ〔2−3，4−1〕に〔新たな〕科学的に強い契機 moment が形成され、逆に、古典主義がもっとも強固な認識論的〔つまり科学的〕絆で締めつけていたところ〔1−2，3−4〕に哲学的な空間が開けるのだ」（MC, 219, J, 228）。したがって、フーコーによれば、古典主義時代と次の時代とでは、科学的（認識論的）契機と形而上学的（哲学的）契機が入れ替わることになる。フーコーは古典主義時代と次の時代の二つの知の四辺形を提示しており、科学的契機はどちらも実線で示されるが、実際、その実線の位置が二つの図において変化していることが確認できる。



新たな科学的契機

フーコーは続ける。「実際、新たな〔科学である〕『経済学』の新たな企てとしての生産の分析 analyse de la production は、1−2 価値と 3−4 価格の〔二線分の相互の〕関係の分析をその本質的役割とする」（MC, 219, J, 228）。すでに見てきたように、価値は 1−2 の線分に沿って生じ、価格は 3−4 の線分に沿って生じた。よって、「価値と価格の関係」は、古典主義時代の形

而上学的契機〔2−3, 4−1〕に相当するが、そこに新たな科学的契機が形成され、経済学の「生産の分析」が成立するとされる。実際のフーコーの図では、この「生産の分析」は、2−3 と 4−1 の二つの新たな科学的契機のうち、2−3 の辺に沿って配置されている。なお、この「生産」の概念については、『言葉と物』第七章「表象の限界」、第八章「労働、生命、言語」で広く扱われることになろう。一方、同じ図で、4−1 の辺に沿っては「〔商品〕流通の分析 analyse de la distribution」が配置されているが、この概念については、フーコーは『言葉と物』においてとりたてて分析していない(6)。

次いで、フーコーは考察を言語へと類比的に展開する。「1−2 一言語の形式的諸能力（命題を成立させるその言語の力）と、3−4 その言語を構成する諸単語の意味とを結びつけるために、「文献学」は、もはや言説の表象的機能ではなく、歴史に従属した形態上の恒常的諸要素 constants morphologiques の総体を研究するであろう」（MC, 220, J, 228）。ここで、フーコーは、富の分析における「価値」と「価格」と類比的に「一言語の形式的諸能力」と「その言語を構成する諸単語の意味」とに言及している。つまり、この両者は 1−2, 3−4 の線分に対応していよう。古典主義時代には、言語の表象機能が、形式〔1−2 の線分〕と現実の展開（歴史を含む展開）〔3−4 の線分〕とにおいて全面的に研究されたのであった。それに対して、新たな時代には、文献学が「3−4 歴史に従属した 1−2 形態上の恒常的諸要素の総体」を研究するであろう。この文献学は、向かい合う 1−2, 3−4 の二線分の間、2−3 の辺と 4−1 の辺によって示されよう。実際のフーコーの図においては、2−3 の辺に沿って「音声学」が、4−1 の辺に沿って「統語論」が配置されている。これらは「文献学」の下位分野であろう。これらについては『言葉と物』の後の章であらためて論じられることになろう。

さて、フーコーは総括的に述べる。「文献学、（…）経済学は、かつての〈一般文法〉、（…）〈富の分析〉と同じ場所に成立するのではなく、それらの知の実在しなかったところ、それらの知が空白のままに残した空間、それらの知における相対する二本の大きな理論的線分〔1−2, 3−4〕を隔てていた、存在論的連続体のざわめきにみちたあの深い畝溝の底に成立する。十九世紀における知の対象は、古典主義時代における存在の充満が今し方つぶやきをやめたばかりの、まさにその同じところに形成されるのだ」（ibid.）。古典主義時代の知を示すフーコーの図においては、1−2, 3−4 の「二本の大きな理論的線分」の間には「名称体系」と記入されている。しかし、基底は、「存在論的連続体のざわめきにみち」、「存在の充満」が「つぶやく」場所であった。そうした存在は、科学の対象ではなく、形而上学、哲学の対象であった。古典主義時代の科学は表象を扱うものであり、名称体系を成立させはしたが、存在を対象とはせず、名称体系の下に広がる存在の領域は「空白のままに」残された。十九世紀になって、そうした存在が＜科学の＞対象とされるようになった、ということであろう。なお、そうした変化が生じた経緯は、次に続く、第二部の最初の章である第七章以降で細かく検討されることになろう。

新たな哲学的、形而上学的契機

さて、フーコーは段落をあらためて続ける。古典主義時代に 1. 帰属関係定立と 2. 分節化、および 3. 指示と 4. 派生は、それぞれ結びつけて考えられていたが、いまやそれぞれ分離し、相互の関係が哲学的に探究されることになるという。「〔新たな科学の成立とは〕逆に、古典主義時代の知の対象が解体するところに、いまや新たな哲学的空間が開けつつある。1. 帰属関係定立の契機（判断の形式としての）と 2. 分節化の契機（存在一般の裁断としての）とが分離し、1′ 形式的命題学 apophantique と 2′ 形式的存在論との関係の問題を生じさせる。原初における 3. 指示作用の契機と、時間の流れのなかでの 4. 派生の契機とが分離し、そこに開かれた空間のなかで、3′ 起源における意味と 4′ 歴史との関係の問題が提起される。こうして、近代における哲学的反省の二つの大きな形態が定置される。一方は、1′ 論理学と 2′ 存在論との関係を問い、形式化を目指すさまざまな道をたどりつつ、新たな相のもとにふたたび 1′–2′〈マテシス〉の問題にめぐり合う。他方は、3′意味と 4′時間との関係を問い、未完の、そしておそらく決して完了しないはずの解明作業を企てつつ、3′–4′〈解釈〉のテーマと方法をふたたび明るみに出すのである」（MC, 220, J, 228–229）。「マテシス」は古典主義時代の秩序に関する一般的科学であるが（本論文（上）参照）、図の 1–2 の辺に沿って成立する「結合法」をその方法としていたであろう。近代になると、ここで、1′ 形式的命題学（論理学）と 2′ 形式的存在論の関係が問われるとされる。一方、「解釈」は、かつてルネサンス時代には、類似を手がかりに記号を「解釈」することが認識であるとされていたが(7)、古典主義時代の図からはこの概念は姿を消していた。近代になると、「3′ 起源における意味と 4′ 歴史との関係」を問う哲学的反省（つまりは解釈学）が生まれるとされる。

さて、フーコーはさらに、近代における、もっとも基本的な哲学的課題を指摘する。「哲学に対してそのとき提起されうるもっとも基本的な問題は、おそらく、反省のこの二つの形態〔1′–2′ 形式化と 3′–4′ 解釈をめぐる二つの反省〕のあいだの関係にかかわるものであろう。たしかに、この関係が可能であるか否か、それがいかなる基礎をもちうるのか、そうしたことを述べるのは知の考古学の任務ではあるまい。けれども、知の考古学は、この関係がいかなる地域において結ばれようとするのか、〈エピステーメー〉のいかなる場所に近代哲学が自らの統一性を見いだそうとこころみるのか、知のいかなる点に近代哲学がそのもっとも広い領域を発見するのか、指示することができる。そのような場所とは、1′–2′（命題学と存在論の）形式的なもの formel が、3′–4′ 解釈において明らかにされる意味あるもの significatif と接合されるところであろう。（…）近代的思考が基本的に問題とするのは、1′ 真であるものがもつ形式および 2′ 存在がもつ形式に対して、3′–4′ 意味というものがいかなる関係にあるかである。私たち〔近代の人間〕の反省の天空には、一つの――おそらくは到達不能の――言説が君臨している。それは、2′ 存在論であると同時に 3′–4′ 意味論でもあるような言説なのだ」（MC, 220–221, J, 229）。『言葉と物』の第二部においては、こうした変化は引用によって具体的に跡

づけられることはないが、変化の意味をめぐっていわば「メタ＝哲学的」な考察が展開されることになろう。

8．欲望と表象

私たちは、『言葉と物』第一部の最終章である第六章「交換すること」の最終節「欲望と表象」に到達した。ここで、フーコーは、古典主義時代についての総括的考察を行っている。

「十七世紀および十八世紀の人々は、(…)〔知の〕一つの全体的配置から出発して思考したのであって、その全体的配置が、(…) 基本的に、言語や、自然における個体や、欲求および欲望の対象に対して、ある種の存在様態を規定したのである。この存在様態とは表象としての存在様態である。(…) 表象が、言語、諸個体、自然、さらに欲求そのものの存在様態を律している。したがって、表象の分析は、すべての経験的領域にとって決定的価値をもつ。古典主義時代における秩序の体系のすべて、(…) あの偉大な〈タクシノミア〉のすべては、表象 la représentation が自らを表象するときに自らの内部に開く空間のなかで展開される。存在と同一者 le même はこの空間に自らの場をもつのである」(MC, 221–222, J, 229–230)。ここで「表象」は総称的に語られているが、具体的には、さまざまな事物の表象を、他のさまざまな表象が記号となって代理（表象）し、表象の網目が形成されていくことになろう。このことを、「表象が自らを表象する」、「自らの内部に空間を開く」と言っているのであろう。また、「同一者」は、存在のうち、特に自己同一性（それが個体から種属までさまざまなレベルで考えられるとしても）を維持する存在を指しているのではなかろうか。フーコーは続ける。「言語はもろもろの語の表象でしかなく、自然は諸存在の表象でしかなく、欲求は欲求の表象でしかない。古典主義時代の思考 (…) の終焉は、表象の後退、というよりはむしろ、言語、生物、欲求の表象からの解放と一致するであろう」(MC, 222, J, 230)。表象から解放されたこれらの事物は、新たな「科学」の対象となることもあり、また、新たな「哲学」を要請することもあろう。フーコーは続ける。「そのとき、語りつづける民衆の晦冥だが執拗な精神、生命の激しさとその不断の努力、欲求のもつひそかな力が、表象としての存在様態から逃れ出るであろう。そして表象は、意識の形而上学的裏面としてあらわれる自由、欲望、意志 volonté の強大な推力によって、(…) 外部から支配されることとなろう。意志 vouloir あるいは力に似た何ものかが、近代の経験のなかに出現しようとしている」(ibid.)[(1)]。とはいえ、問題によっては人間の認識の容易な接近を許さず、新たな「科学」あるいは「哲学」の行く末は必ずしも平坦ではなかろう。このように、ここまでに検討した第六章「交換すること」第七節「全体的な表」の末尾二パラグラフ、および本節（第八節）「欲望と表象」では、＜近代的（十九世紀的）なもの＞が予示されたことになる。フーコーは、『言葉と物』第二部において、この＜近代的なもの＞を――網羅的とは言えないが――より具体的に検討してゆくことになる。

むすび

本論文を三回に分けて書き継いできたが、『言葉と物』とコンディヤックの関係を問う作業は一応これで終える。表象と記号を扱う第三章、言語を扱う第四章については、コンディヤックが著者フーコーの極めて重要な分析対象であり、発想源ともなっていたことを確認できただろう。富の分析を扱う第六章については、考察対象としてのコンディヤックの比重は限定的であった。しかし、表象という統一的視点から古典主義時代の思考様式をとらえようとするフーコーにとって、コンディヤックは、哲学・言語論という人間の認識活動にかかわる分野と、富の分析という人間の社会的活動にかかわる分野でともに著作を残した、好個な分析対象であり、特権的な著者であった。本論文を結ぶに当たって、コンディヤックについてのフーコーの評価を振り返っておきたい。

『言葉と物』第三章「表象すること」では「記号の表象作用」が考察された。つまり記号論、表象論が扱われた。ここではコンディヤックから直接引用されることこそなかったが、コンディヤックは章を通じて名指され、また援用された。この章の第二節「秩序」では、デカルトについての考察に続けて、古典主義時代の知が「マテシス（普遍数学）」と基本的な関係をもち、その上に経験的諸領域における「秩序の学」を目指したとされた。その方法が「記号の体系」を構成することであったという。コンディヤックも、人間の自然な諸能力を探究する中で、その探究過程の数学化を理想としていたと見なされている（本論文（上）p. 8–12）。第三節「記号の表象作用」では、まず、記号と対象の関係の (1) 確実性、(2) 切断性（区別性）、(3)（自然的あるいは人為的な）起源、について考察されたが、この段階からコンディヤックが援用された（同 p. 12–15）。次いでフーコーは、人為的恣意的記号（つまり言語）の体系がもつ機能を、事物の分析と事物の生成の跡づけとして原理的に考察したが、この展開はコンディヤックの『人間知識起源論』における認識論に即したものであった（同 p. 15）。フーコーはこの時代の言語体系の理想を「よくできた言語」であったとするが、この理想もコンディヤックに由来するものであった（同 p. 16–18）。

続く第四節「二重化された表象」においては、記号の機能の本質を「表象」、それも「二重化された表象」とみなして、その分析が行われる。次いで、こうした記号がもたらした帰結、(1) 記号の重要性・偏在、(2) 特別な「意味作用」の不在、(3) 記号と表象との根本的関係、が確認される。この (1) の観点からコンディヤックに言及されるほか、(3) においても、コンディヤックの感覚論哲学をふくむ広義の「観念学」に言及された（同 p. 18–21）。第五節「類似関係の想像」において、これまで見た古典主義時代の認識形式が、人間個人においてはどのように実現されるのか、が検討される。自然界における事物の類似を前にしての「想像」の成立と、それを通した認識の「生成」についてのフーコーの議論を、私たちはコンディヤックを念頭に追うことができる（同 p. 21–25）。第六節「『マテシス（普遍数学）』と『タクシノミア（分

類学)』」では、マテシス（普遍数学）が単純な本性を代数学的に扱い、秩序づけようとするのに対して、「さまざまな複雑な本性の秩序づけ」を担うものがタクシノミア（分類学）であるとされる。それは、マテシスとの関係においては命題学に対する存在論として機能する。それはまた、認識の生成を扱う生成論――これは集合的にみればいわゆる歴史（人類史）であり、個人においてみれば個人史である――との関係においては記号学として機能する。おもに前者の関係を扱うのが合理論、後者の関係を扱うのが経験論と思われるが、コンディヤックの場合には、記号論に数学的なものの導入を図るなど、前者の側面も併せもっていたように思われる（同 p. 25–29）。

『言葉と物』第四章「語ること」では、第三章で記号論＝表象論が扱われたのに対して、＜継起的に機能する記号＞としての言語が扱われる。本章でフーコーはコンディヤックから多く引用する。第二節「一般文法」では、一つ一つの思考（複合観念、複合表象）が同時的統一体であるのに対して、言語活動は「継起的」であると指摘される。こうした指摘はコンディヤックにすでに見られる。一般文法はこの継起的な秩序を明らかにするものである（本論文（中）p. 3–4）。フーコーはこの一般文法を「思考の反省的な分解」の原理のように見なすが、コンディヤックはすでに、言語が完全性を高めて、事物についての諸観念の「生成〔の仕方〕をわかりやすく示す」ようになるとき、言語は、その事物についての「思考の分析」になるとしていた（同 p. 4–5）。さらに、一般文法の帰結もコンディヤックの思想を参考にして考えられていよう。つまり、1.「よくできた言語」のような言語の理想と、2.『起源論』で展開されたような人間の認識を跡づける生成論との誕生である。後者を前提として前者の理想が展望されることになろう（同 p. 6–7）。

次いでフーコーは一般文法のより具体的な検討へと向かい、まず第三節「動詞の理論」で動詞を検討する。コンディヤックは動詞の働きを＜観念の関係の判断の表示＞としたが、これは「帰属関係の肯定」と読み直される。また、コンディヤックは、事物は少なくとも私たちの精神の中で実在しているのであり、動詞によってこの実在が表されるとする。これを受けて、フーコーは、動詞が表象あるいは思考の実在を肯定する、と言うことになろう（同 p. 10–13）。第四節「分節化」においては、命題が成立するためには少なくとも一方の名詞が一般性をもつ必要があると指摘されるが、こうした指摘はすでにコンディヤックがしている。名詞が一般性を得る二つの仕方とされる、名詞群の「水平方向の分節化」や、形容詞の成立によって生まれる「垂直方向の分節化」も、コンディヤックの考え方に基礎を置いていることが確認できる（同 p. 14–15）。

第五節「指示」においては、人間の言語の原型としての行動言語が、対象を指示する恣意的人為的な音声記号へとつながったとされる。ここでも念頭に置かれるのはコンディヤックの議論である。また、言語の発展の過程で「記号の意図的用法」が生じるとも指摘されるが、こうした用法もコンディヤックの展開に認めることができる。さらに、既存の音声記号との類比、

あるいは対象から得られる視覚などの他種の感覚との類比によって、新たな音声記号が合成されていくともされる。こうした点にもコンディヤックは言及しており、フーコーの論述は、コンディヤックの論述の含意を最大限深化させたものと考えることができる（同 p. 18–21）。第六節「〔意味の〕派生」では、語が時間の中で意味の変化を被ることが扱われる。コンディヤックはこの点について明瞭に語ってはいないが、たとえば、記憶によって、ある知覚表象それ自体よりも、関連する記号や状況が呼び起こされることがあるとする。同様にフーコーも、表象間に連関があり、ある表象は記号（他の表象）によって代理されることを確認し、その先に、記号が比喩的に変様、拡張されていくと想定しているように思われる（同 p. 24–26）。

『言葉と物』第六章「交換すること」では、その第六節「有用性」において、価値と交換に関する「心理学的理論」の例としてコンディヤックに論及される。コンディヤックにおいては、ある事物が有用であるとの判断が価値を基礎づける。これはテュルゴの「尊重価値」の概念に相当する。ところで、交換で一般的なのは、交換当事者のそれぞれが、相手のもつ商品の一部が自らのもつ商品の一部より自分にとって有用だと見積る場合であろう。双方からのこれら「二つの見積られた不等性」が釣り合うように、交換すべき量が調整されることになる。こうした交換において、当事者のあいだで交換物について定まる価値をテュルゴは「評価価値」と呼び、フーコーもこの術語を利用している。コンディヤックもこうした交換の状況を考察しているが、彼は「評価価値」に相当するものに「値打 prix」（CG, 28）という術語を与えている。結局、第六節「有用性」におけるフーコーにとっての第一の参照項はテュルゴであろう。とはいえ、フーコーは、コンディヤックをテュルゴとともに効用主義の代表者とみなし、この時代の富の分析を論ずる上で欠かせない存在として分析した。コンディヤックはこの時代の表象論、言語理論の代表的理論家であり、富の分析の分野でも著述を残したため、フーコーにとっては、まさに古典主義時代を体現する思想家であったのである。

*　　*　　*

本論文ではコンディヤックとの関係で『言葉と物』を検討したが、その内容は、『言葉と物』全体の中では、前半（第一部）の末尾までの内容に含まれる。ところで、コンディヤック自身は1780年に死去するが、その思想は次代へ、特に観念学派へと受け継がれる。したがって、コンディヤック以後の世代の思想を扱う『言葉と物』第二部の内容は、コンディヤック思想の影響を追うという観点からも興味深い。この第二部の展開の大きな方向性を、筆者なりにごく大まかに記してみるなら、――古典主義時代の思考は、その時点までに成立した表象体系もすでに真実を反映していると考えたため、全体としては発展性を失ってしまった（コンディヤックの分析理論自体は、人間による認識はさらに発展・深化していくと想定していたのだが）。近代においては、表象作用の外で、一方で、言語、生物学、経済学の分野で実在（存在）の領域が「科学的」に分析されるようになり、また、「判断」や「解釈」など「人間」のあり方が

問われるようになっていく。しかし、「人間」の謎にとらわれることのなかった古典主義時代の表象の思考は、現代の思考がこれから向かうべき方向について示唆を与えてもくれよう。――本論文に続けて、筆者は、『言葉と物』第二部の展開を、コンディヤック思想の行く末との関係において検討してみたいと考えている。

略号

MC : Foucault, Michel, *Les mots et les choses — une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966.（フーコー『言葉と物――人文科学の考古学』、新潮社、1974.）

CG : Condillac, *Le Commerce et le gouvernement*〔商業と政府〕［1776］（参照箇所の指示には Houel 版著作集第Ⅳ巻［参考文献欄参照］のページを示す）

注

* 本文中で用いる文献の略号は上の略号欄を、注でふれる文献の書誌情報は参考文献欄を参照されたい。
* 引用文あるいは本文・注における番号・符号、＜ ＞、下線は、理解の便を図って筆者が補足した。
* 引用文中の〔 〕内の記述は筆者による補足である。
*『言葉と物』の訳文中の〈 〉はイタリック体の語または大文字ではじまる語を示す。「 」は « » に相当する。

Ⅲ.

1．富の分析

(1) 本論文（下）での『言葉と物』への指示は、（MC, ---, J, ---）の形式で、順にフランス語原著、邦訳初版の該当ページを示す。邦訳は2020年2月に「新装版」（第二版）が刊行された。この新版は、訳文、訳注、解説付き索引などの内容は初版のままだが、組版の形が変更されたため、ページ数に変化が生じている。しかし、新版刊行前に執筆した本論文（上）、（中）がすでに公表されており、（下）のみ新装版に対応しても、その意味は限定的である。そのため、新装版のページを記載することは見送った。ご了承いただきたい。その他、『言葉と物』から引用する場合の形式の詳細は、本論文（上）の注の I–1–(2) を参照されたい。

2．貨幣と価格――十六世紀

(1) フーコーは多くの一次文献を渉猟し、それらに基づいて第六章を執筆している。フーコーが援用する著者は、匿名の著者も含めて40人を超える。一方、本論文は、この章の本文の論旨を示しながら論述するが、フーコーが援用する著作の内、内容にまで多少とも立ち入って検討できるのはコンディヤックと、彼と並べて論じられるテュルゴのものに限られる。その他の著者の援用の仕方については直接フーコーの文章に当たられたい。ただし、フーコーが論旨の展開に応じて誰を援用するのかたやすく確認できるよう、おおむねフーコーの文章の各パラグラフの末尾に相当する位置で、そのパラグラフで援用される著者の姓を掲げる。なお、実際に引用される著作の内、本論文執筆時点で日本語訳があるのは次の著者のものに限られる。出現順にホッブズ、モンテスキュー、ロック、テュルゴ、カンティロン〔注4–(4) 参照〕、ヒュームである。著者を掲げる際にこの六人には注を立て、フーコーが引用する箇所に対応する邦訳の箇所を示した。日本における研究とフーコーの議論との関係を示そうとのねらいであり、適宜参考にされたい。なお、著者の姓の発音については *Duden Aussprachewörterbuch*, Mannheim, 1974 を参照し、日本語表記に反映させた。

(2) 本論文（上）p. 2, 8, 12–14, 21, 28 を参照のこと。

(3) この時代、実在性において区別される貨幣と金属の間にもある種の類似の関係、つまり記号の関係が成り立つと考えるべきかもしれない。

(4) 上の注 (2) を参照のこと。

3．重商主義――古典主義時代

(1) フーコーは次のように補足している。「重商主義が富と貨幣を混同したと信じられたのは、たぶん、重商主義にとっては、貨幣が、可能なかぎりのあらゆる富を表象する力をもち、それを分析し表象する際の普遍的道具であり、富の全領域をくまなく覆っていたからであろう。」（MC, 186–187, J, 196）

(2) フーコーは『リヴァイアサン』の次の箇所の内容をパラフレーズして紹介している。Th. Hobbes, *Leviathan* (éd. 1904, Cambridge), p. 179–180. 邦訳では次の箇所に相当する。ホッブズ『リヴァイアサン』、第二部「コモン–ウェルスについて」、第二四章「コモン–ウェルスの栄養および生殖について」、「§貨幣はコモン–ウェルスの血液である」、そしてとりわけ次に続く「§貨幣が公共の使用にいたる諸通路および道路」（第II巻、p. 143–145）。

4．担保と価格――貨幣

(1) 「ローの実験」については、フーコー自身後段で少し言及する。本論文 p. 7、および本項の注 (6) を参照のこと。

(2) フーコーはそれぞれの主張の主要な唱導者の名前を挙げているが、商品としての貨幣説（貨幣商品説）の側にコンディヤックの名前も含まれている。

(3) フーコーは、モンテスキューを貨幣記号説の主張者とし、次の箇所の参照を指示している。Montesquieu, *L'Esprit des lois*, liv. XXII, chap. II. すなわち『法の精神』第二二編「貨幣の使用との関係における法律について」、第二章「貨幣の本性について」である。この章で、「貨幣はあらゆる商品の価値を表示〔表象〕する représenter 標識〔記号〕signe である」として、貨幣が記号とみなされ、かつ「表象」という術語が用いられていることは注目に値する。

(4) ロックが「貨幣を担保と規定」しているとしてフーコーは次の箇所を指示している。Locke, *Considerations of [the consequences of] the lowering of interest* (*Works*, Londres, 1801, t. V, p. 21–23). 邦訳では次に該当する。ロック「利子の引下げおよび貨幣の価値の引上げの諸結果に関する若干の考察」、『利子・貨幣論』、p. 32。ここでロックは次のように言う。「トレード〔取引〕にとって一定の割合の貨幣が必要なのは、(…) 貨幣が証書ではとってかわることのできない保証物〔担保〕pledge であるということに基づいているのである。」

(5) 君主や国家が貨幣にその有効性を保証しているとする考えは、本論文 p. 4、p. 5におけるフーコーからの引用にも表れていた。

(6) 本文の「土地所有権を担保とする紙の貨幣……」の部分と、続く引用は、ローが1705年にスコットランドでした提案に関わる。この提案が受け入れられなかったローは1706年にフランスに渡る。1716年以降、私営の「一般銀行」の設立、一般銀行券に租税支払いなどの強い通用力の付与、「王立銀行」への改組と総裁就任（1718）、ルイジアナ植民地開発の特権の取得と貿易会社設立（1717）、合併による「インド会社」設立とフランス海外貿易の独占（1719）、と活動を拡大した。会社の株価は王立銀行券の大量発行もあって投機的な高値が付いたが、やがて下落に転じる。1720年、ローは王立銀行をインド会社に統合、併せて金銀正貨の通用を事実上禁止し、銀行券を唯一の法貨とすることを宣言した。フーコーは、ローが「一貿易会社に〔紙の〕貨幣の担保を保証させ」たとするが、銀行券の通用力をインド会社の資産と信用によって支えようとした体制を指そう。結局、株、銀行券ともに信用を失い、1720年5月、ローは失脚、金銀正貨の流通が全面的に復活した。Cf. 津田内匠「解説」（カンティロン『商業試論』）

(7) ここで次のようにテュルゴの参照が指示される。*Seconde lettre à l'abbé de Cicé*〔シセ神父への第二の手紙〕[1749] (*Oeuvres*, t. I). この著作は紙幣についての考察を含む。邦訳はない。テュルゴの生涯と思想については、津田内匠「解題」（『チュルゴ経済学著作集』）を参照のこと。なお、津田は「チュルゴ」と表記するが、『言葉と物』の邦訳も使う「テュルゴ」という表記がフランス語の発音を表すのにより適切と思われ、本論文ではこちらを用いる。

テュルゴは貨幣記号説は取らないが、貨幣を単なる記号としてはとらえないということであり、貨幣に記号の性格を認めることを妨げない。シセへの手紙では、「金銭は他の商品の記号ではなく、商品としての資格において、他の商品の共通の尺度である」として、記号と尺度を分ける言い方をしているが、後の『価値と貨幣』（後段参照）においては、貨幣は「一種の言語」であるとするに至る。「貨幣はあらゆる種類の尺度と次の共通点をもつ。つまり、貨幣は一種の言語なのであり、この言語は、恣意的慣習的なあら

ゆる点で諸国民のあいだで異なるが、いくつかの点では、それがもつ諸関係を通じて、ある共通の項 terme ないし規準 étalon に接近し同一化する」(Valeur et monnaies, *Oeuvres*, t. I, p. 79〔『価値と貨幣』、p. 149〕)。貨幣の場合、共通の項とは商品の価値そのものであることになる。各国で単位は任意に決定されるとしても、言語(記号)としての原理は共通なのである。

(8) フーコーも指摘するように、このメカニズムが「数量法則 loi quantitative」と呼ばれる。

(9) フーコーの本文でのロックからの引用の頁は正しくは次のようである。Locke, *op. cit.*, p. 46–47. 邦訳、ロック、上掲書、p. 70–71. 英語原文とフランス語化されたフーコーの引用とにはやや食い違いが見られる。また、このロックからの引用の少し前にある、出典指示のない「貨幣の量は取引の全体と比例関係にある en proportion avec のだから」という引用も、ロックの同じ作品の次の箇所から引かれていよう。*Op. cit.*, p. 49. 邦訳、上掲書、p. 75. 引用は不正確で、英語で「一般的な貨幣の価値は全取引との比例関係における in proportion to 世界の全貨幣量にある」という部分から取られていると思われる。

(10) モンテスキューからの引用は次のように指示される。Montesquieu, *L'Esprit des lois*, liv. XXII, chap. VII. すなわち『法の精神』第二二編「貨幣の使用との関係における法律について」、第七章「標識たる富の変化の中で物の価格はいかにして決まるか」である。なお、フーコーは不正確な仕方で引用している。

(11) フーコーは次の著作の参照を指示する。Cantillon, *Éssai sur la nature du commerce en général*〔商業一般の本性に関する試論〕[1755] (édition de 1952). 邦訳、カンティロン『商業試論』。フーコーによる頁の指示は一部不正確だが、彼が依拠するのは第二部第三章「貨幣の流通について」である。『商業試論』については、訳者津田の「解説」が参考になる。カンティロン Cantillon(?–1734)は、アイルランド生まれの経済学者。若年の内にフランスに渡り、フランスで銀行業を営み、ローの政策にも深く関わった。上掲の *Essai …* が残された唯一の著作である。カンティロンの姓は、フランス語圏では「カンティヨン」と発音されるが、当人が英語圏の出生で、英語を母語とし、執筆も基本的に英語で行ったとみられることから、わが国の近年の研究と同じく「カンティロン」と表記する。*Essai …* も英語で草稿が書かれ、著者本人による私的なフランス語訳だけが後世に伝わったとのことである。なお、彼の先祖はフランス系とのことであり、姓もフランス系と思われる(上記「解説」参照)。

(12) パラグラフ末尾のカンティロンからの引用は第二部第八章「一国における現金の量の増減に関する別の考察」から取られている。頁の指示は誤りで、正しくは次のようである。Cantillon, *op. cit.*, p. 102. 邦訳、上掲書、p. 119.

(13) スペインは、植民地からの金の流入による通貨量の急激な上昇に、産業と人口の増加が追いつかず、物価騰貴となった。イギリスでは、金の増加に労働者数と生産量の増大がつりあった、とされる。

(14) ヒュームからの引用は次のように指示される(フーコーの記述は不正確なため訂正した)。Hume, *De la circulation monétaire* (*Oeuvre économique*, trad. Française, p. 30–32). 邦訳、『道徳・政治・文学論集』、2011、p. 233–234. フーコーの引用の仕方はやや不正確である。

5. 価値の形成

(1) 富の分析で、本論文の前項「4. 担保と価格」で見たような貨幣、貨幣による商業、価格などを考える場合、四辺形の図では、3. 指示から 4. 派生への別の線分が対応させられている。つまり、「担保としての貨幣」が 3. 指示に、「流通と商業」が 4. 派生に対応するとされる。

本論文では、生物に関わる知についてはふれないが、古典主義時代のこの分野、つまり博物誌においては、1–2 の線分には「構造」、3–4 の線分には「特徴」が位置するとされる。「構造」は、自然界の諸存在における「可視的なものの(…)記述」であるが、「言語における 1.〈命題〉と 2.〈分節化〉の役割を、ただ一つの機能のうちに重ねあわせ」、「固有の名」(=固有名詞)となろう(J, 157–161)。「特徴」は、「確実な 3.〈指示〉と制御された 4.〈派生〉とを一挙に実現す」るものであり、個別の指示名称に〈派生〉の働きが加わって、「一般的価値」が付与され、普通名詞が生まれる。それによって、事物の同一性と差異の体系への位置づけも可能となる。博物誌は「よくできた言語」として、〈特徴〉のこうした働きを保持している、とされる(MC, 150–151, J, 161)。

(2) ケネーによる『百科全書』「人間 Hommes」の項目のための原稿から引用されるが、フーコーが指示する Daire (dir.), *Physiocrates* には収められていない。

(3) カンティロンは、次のケネー、テュルゴとともに、労働者の賃金が生活費に限定されることについて引か

れる。参照箇所は指示されない。

(4) フーコーが原注で *Maximes de gouvernement*（『統治の原則』）とする著述は、ケネー執筆の『百科全書』の項目「穀物 Grains」の一部である。

(5) テュルゴからの引用は次のように指示される。*Réflexions sur la formation des richesses*, §6,『富の形成と分配に関する諸考察』第六節〔『チュルゴ経済学著作集』〕。

6．効用主義者の立場――有用性

(1) フーコーはカンティロンに a, b 二つの面が併存するとする。すなわち、一方で、土地に重要性を与えたことが重農主義者から評価されたとする。フーコーは具体的に、カンティロンの上掲書の第二部第三章「貨幣の流通について」（注4–(10) 参照）の冒頭における、借地農にとっての「三つの地代」（Cantillon, ibid., p. 68–69, 邦訳、上掲書、p. 81）の記述に言及する。しかし、この考え方と重農主義者との関係をフーコーがどのように考えたかは不明である。他方、フーコーは、カンティロンの「流通回路の分析と、貨幣に割りあてた役割」は効用主義者から評価されたとする。これについてフーコーは（参照指示に誤りがなければ）同じ第二部第三章の後段の貨幣流通の分析を指示している。

(2) フーコーは、テュルゴにも、『富の形成と分配』（1766）における重農主義、『価値と貨幣』（1769）における効用主義という二つの面が併存することを、参照指示なしに指摘する。これは広く知られた事柄である（Cf. 津田内匠「解題」〔『チュルゴ経済学著作集』〕p. 10–11, p. 17–18；米田昇平『欲求と秩序』、p. 324）。

(3)『商業と政府 *Le Commerce et le gouvernement*』（1776）はコンディヤック（1715–1780）が初めて取り組んだ商業理論、経済学 science économique の書である。commerce は「交易、商取引、商業」の意味だが、この書では、物品売買の商取引、つまり比較的狭義の「商業」が扱われる。「交易」という訳語は、音だけでは「公益」と受け取られるおそれがあり採用しなかった。商業に関係する基本的諸概念、諸原理を扱う第一部と、政府の政策との関係で商業を考察する第二部からなる。初版が二部構成で刊行された際には、これら二部の内容を事実を引いて検証する第三部が予告されていた。しかし、コンディヤックが生前行った自著への加筆を反映して著者の死後刊行された『コンディヤック著作集 *Œuvres de Condillac*』（1798, パリ、ウエル Houel 社、アルヌーArnoux、ムニエ Mousnier 編集）で、編者は「著者はこの第三部がもう必要ないと考えた」と報告している。本論文ではこの著作自体の立ち入った検討はなしえないが、著作の概要と問われている問題等については、米田昇平『欲求と秩序』（2005）を参照されたい。なお、古茂田宏によると、本書は「当時財務総監の地位にあり絶対王政の枠内での経済改革に努めていた友人テュルゴへの援護射撃的献策の書としての性格を帯びていた」とのことである（コンディヤック『人間認識起源論』（下）「解説」）。また、コンディヤックはパルマ公王子の家庭教師を務め多分野にわたる『教程』を残している。本書は『教程』からは独立した著作であるが、家庭教師としてコンディヤックが多分野の研鑽を積んだことが、この商業理論の著作を可能にした面もあるかもしれない。

(4) *Valeurs et Monnaies*, p. 89.『価値と貨幣』、p. 157.『価値と貨幣 *Valeurs et Monnaies*』（1769）は、テュルゴ Turgot, A. R. J.（1727–1781）の生前未刊行の草稿。参考文献欄参照。

(5) この語にフーコーは次のように注を付けている：*Valeurs et Monnaies*, *Oeuvres*, éd. Schelle, t. III, p. 91–92. これは『価値と貨幣』、p. 156–159 に該当する。ところで、直前のコンディヤックからの引用では、価値は「見積る estimer」ことに関係させられた。フーコー自身も価値を「見積る」ことに関係させ（本論文 p. 18）、「この二つの見積られた不等性 inégalités estimatives」といった言い方もされることになる（同 p. 18）。フーコーは valeur estimative〔尊重価値〕を「見積られた価値」ととらえていた可能性がある。しかし、本論文ではテュルゴ自身の説明に合わせ、邦訳の訳者津田内匠と同様に「尊重価値」とする。

(6)「この場合、私は、私の麦はあなたにとって、あなたのぶどう酒が私にとってもつ価値〔と同じ価値〕をもつと見積る」（CG, 26–27）。

(7)「私の余分があなたの消費に十分であって、あなたの余分が私の消費に十分でなければ、私は自分の余分をすべてあなたの余分のために与えはしない。というのも私があなたに譲渡するものは、あなたが私に譲渡するものが私に対してもつ価値よりも、あなたにとって一層価値があることになろうから」（CG, 27）。ここでは、交換者は自分に不利になる交換はしないと示唆されていることになる。

(8)「交換が成立するとき、たとえば4桶のトウモロコシを5抱えの薪に対して与える人は、おそらくこの5抱

えの薪を 4 桶のトウモロコシよりも好む（préférer）のだ。（…）だが、4 桶のトウモロコシを受け取る人は、それらを 5 抱えの薪より好むのだ」（*Valeurs et Monnaies*, p. 91〔『価値と貨幣』、p. 158〕）。

(9) 「あなたは多くの麦に対してできるだけ少ないぶどう酒を私に与えるだろうし、私は、多くのぶどう酒に対してできるだけ少ない麦をあなたに与えることだろう。（…）〔交渉の中で〕私はあなたに少し多くの麦を与えるだろうし、あなたは私に少し多くのぶどう酒を与えるだろう。何回かの相互の提案の後で、私たちは互いに同意するだろう」（CG, 27–28）。

(10) フーコーは明記していないが、この引用の出典は Turgot, *Valeurs et Monnaies*, p. 92〔テュルゴ『価値と貨幣』、p. 159〕である。フーコーは続けて「4 桶のトウモロコシと 5 抱え分の薪」を持ち出すが、これも引用箇所のすこし前でテュルゴが示す例である。

(11) 前注参照。

(12) ヒュームが奢侈の重要性にふれる箇所は次のように指示される。Hume, *op. cit.*, p. 41. 邦訳上掲書、p. 238. 彼は次のように言う。「金銀を少数の人だけに限り、それの普遍的な散布と流通を妨げて、国家に害を与えるのは、質素な生活方法なのである。これと反対に、産業活動とすべての種類の洗練は、金銀の量がいかに少なくとも、それを国の全体に組み入れる。」

(13) ここでは、2. 交換に主観性が関与するとされるが、コンディヤックらの理論は「心理学的」とされることもあり、1. 欲求の対象を肯定するいわば心理的な行為との関係も問題となろう。こうした点については、本論文の次項「7. 全体的な表」で論じられよう。

7．全体的な表

(1) 「見積りの価値 valeur d'estimation」と「尊重価値 valeur estimative」は原語が似ているが、全く別様に説明される別概念である。本論文の続く部分を参照のこと。

(2) 第四節では、カンティロンらにおいて、貨幣は国家を富裕にするが、次には貧困にする傾向がある、しかしその貧困化は回避できる、といった考察がなされたと指摘されていた（p. 8–9）。関連して、一般的に＜貨幣が経済を刺激する＞という議論も思い起こしておきたい（p. 5）。

(3) 自然発生的な言語では、個別的な表象にかかわる最初の指示名称が、行動言語と原初の語根のうちに生じ、派生によってしだいに一般的価値を獲得した（J, 161）。

(4) 「判断の線分」、「意味の線分」とされるが、2. 分節化された名詞群を参照しつつ、1. 帰属関係を定立することは、判断の問題にほかなるまい。また、事物を 3. 指示した記号が、それがもつ意味において 4. 派生を起こすなかで、あらゆる意味は展開していこう。

(5) science は、自然科学だけでなく、人文科学や社会科学に使われる場合の「科学」に当たる。ただし、後段で見るように、この語が「哲学」や「形而上学」と対比して使われることには注意が必要である。

(6) なお、生物学の場合、2–3 の辺に沿っては「比較解剖学 anatomie comparée」、4–1 の辺に沿っては「生理学 physiologie」が配される。「解剖学」、「比較解剖学」については、第八章「労働、生命、言語」で広く扱われる。「生理学」については、第七章「表象の限界」、第八章のどちらにおいてもとりたてて分析はされない。

(7) 『言葉と物』第三章「表象すること」第五節「類似性の想像力」末尾などを参照。

8．欲望と表象

(1) 本節（第六章第八節「欲望と表象」）の末尾をフーコーはサドへの言及でしめくくる。サドは、すでに第四章「語ること」の末尾で論じられており、それについては本論文（中）（p. 32）ですでにふれた。そこでは、サドにおいて、言語は、欲望につらぬかれ、事物としての凶暴な姿、生のままの存在を現すとされた。新たな言及においては、秩序との均衡の問題が加わる。「サドの作品が、欲望の掟なき掟 loi と言説的表象の細心な秩序付け ordonnance とのつかの間の均衡を表している、と言うべきかもしれない。〔サドの作品において〕言説の秩序は（…）まだ、その秩序を支配するもの〔＝欲望〕自体と共に実在しつづける力を残している。（…）あらゆる表象は、直ちに生きた肉体のなかで欲望によって生気を与えられなければならないし、〔他方、〕あらゆる欲望は、表象的言説の純粋な光のうちに言表されなければならない。こうして、（…）（サドにおける場面は、表象における秩序ある乱れ dérèglement となり）その場面の内部で、肉体〔＝欲望〕における結合法 combinatoire des corps と〔表象的言説における〕理由の連鎖 enchaînement des raisons とのあいだに入念な均衡が生じることになる。（…）欲望の暗い反復的暴力が表

象の限界に押しよせているのだ」（MC, 222, J, 230–231）。ここでは立ち入らないが、フーコーによれば、サドの作品において、登場人物ジュスティーヌは「欲望の際限のない対象」、ジュリエットは「あらゆる欲望の主体」となっているという。そして、フーコーは、結局、サドの状況は今日にいたるまで続いているとする。「彼〔サド〕以後、暴力、生と死、欲望、そして性が、表象の下に巨大な影の連続面 nappe d'ombre を広げはじめ、私たちは今日、この影の連続面を私たちの言説、自由、思考のなかにとり入れようとして、できるかぎりの努力をはらっている。けれども、（…）〔私たちの思考、自由、言説は偏狭、脆弱、繰り返しであるため、私たちには〕この下方の影を究めつくすのは海を飲みつくそうとするようなことだ（…）。『ジュリエット』の〔悪徳＝欲望の〕栄えは（…）その孤独を深めつつ、続いているのである。」（MC, 222, J, 232）

参考文献（本論文(下)での追加分のみ）

原則としてフーコーが使用した版を筆者も利用した。著作名の後の〔　〕内に適宜書名の日本語訳を補い、次の［　］内に原著初版の出版年を示した。邦訳のあるものは、最後に（　）内にその情報を加えた。

Condillac, *Le Commerce et le gouvernement*〔商業と政府〕[1776], *Oeuvres de Condillac*, éd. Arnoux et Mousnier, Houel, Paris, 1798, t. IV ; *Oeuvres complètes de Condillac*, éd. A. F. Théry, Paris, 1821–1822 [Genève, Slatkine, 1970], t. IV ; *Oeuvres philosophiques de Condillac*, éd. Georges Le Roy, P.U.F., Paris, 1948, t. II.

Turgot, A. R. J., *Seconde lettre à l'abbé de Cicé*〔シセ神父への第二の手紙〕[1749], *Oeuvres* de Turgot, éd. Schelle, Paris, 1913–1923, t. I (1913).

—— *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses* [1770], *Oeuvres* de Turgot, t. II (1914).（『富の形成と配分にかんする諸考察』、『チュルゴ経済学著作集』、津田内匠訳、岩波書店、1962）

—— *Valeurs et monnaies* [1769], *Oeuvres* de Turgot, t. III (1919).（『価値と貨幣』、『チュルゴ経済学著作集』、津田内匠訳、岩波書店、1962）

Hobbes, *Leviathan* [1651], Cambridge, 1904（ホッブズ『リヴァイアサン』、水田洋訳、岩波文庫、1992）

Locke, *Some Considerations of the consequences of the lowering of interest* [1691], *The Works of John Locke*, London, 1801, t. V（ロック「利子の引下げおよび貨幣の価値の引上げの諸結果に関する若干の考察」、『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978）

Montesquieu, *L'Esprit des lois* [1748]（モンテスキュー『法の精神』、野田良之ほか訳、岩波文庫、1989）

Hume, *De la circulation monétaire* [1752], *Oeuvre économique*, trad. française, introduction de Léon Say, Paris, 1888（ヒューム「貨幣について」、『道徳・政治・文学論集』、田中敏弘訳、名古屋大学出版会、2011）

Cantillon, Richard, *Essai sur la nature du commerce en général* [1732までに執筆、1755出版], Paris, INED, 1952（カンティロン『商業試論』、津田内匠訳、名古屋大学出版会、1992）

Daire, Ergène (dir.), *Économistes financiers du XVIIIe siècle, Vauban, Boiguillebert, Jean Law, Melon, Dutot*, Paris, 1851 [Genève, Slatkine, 1971].

Daire, Ergène (dir.), *Physiocrates, Quesnay, Dupont de Nemours, Mercier de la Rivière, L'Abbé Baudeau, Le Trosne*, Paris, 1846 [Genève, Slatkine, 1971].

研究・解説

米田昇平『欲求と秩序――18世紀フランス経済学の展開』昭和堂、2005

――――『経済学の起源――フランス　欲望の経済思想』京都大学学術出版会、2016

津田内匠「解題――チュルゴの経済思想形成の過程に即して」、『チュルゴ経済学著作集』、津田内匠訳、岩波書店、1962.

――――「解説　カンティロン――企業者とディリジスムの経済学」、カンティロン著『商業試論』、津田内匠訳、名古屋大学出版会、1992.

キーワード：フーコー、コンディヤック、言葉と物、富の分析

Résumé

Condillac dans *Les mots et les choses* de Michel Foucault (3)

IINO Kazuo

Cette troisième et dernière partie de l'article examine les mentions de Condillac dans le chapitre VI de *Les mots et les choses*. Ce chapitre, intitulé « Échanger », décrit l'analyse des richesses en Europe occidentale à l'âge classique. Après avoir examiné, dans la section II, la pensée économique au XVIe siècle, Foucault estime dans la section III, intitulée « Le mercantilisme », que la pensée classique fondée sur la fonction représentative des signes correspond au mercantilisme où l'échange joue avec la monnaie un rôle représentatif. La section IV, intitulée « Le gage et le prix », retrace les réflexions à l'âge classique sur la monnaie, qui était concue comme un gage des biens, ainsi que sur sa circulation. La section V, intitulée « La formation de la valeur », examine les réflexions des physiocrates sur la formation de la valeur, qui sert de condition préalable de l'échange.

La section VI, intitulée « L'utilité », traite de Condillac en considérant celui-ci comme un partisan de la « théorie psychologique » de la valeur. Chez Condillac, le jugement que quelque chose est utile soutient la valeur de celle-ci. Cette définition de la valeur correspond au concept de la « valeur estimative » de Turgot. Or, un échange ordinaire doit être celui où chacune des parties intéressées estime que certains produits de l'autre lui sont plus utiles que certains des siens. Chez Turgot, les quantités à échanger seront ajustées de manière à équilibrer les « deux inégalités estimatives » des deux côtés. Condillac examine lui aussi les conditions d'un tel échange. Turgot appelle « valeur appréciative » la valeur des choses échangées, déterminée entre les parties dans un tel échange. Condillac donne le terme « prix » à l'équivalent de la « valeur appréciative », tandis que Foucault adopte le terme « valeur appréciative ». Après tout, Turgot serait la première référence pour l'examen de la théorie psychologique de Foucault. Toutefois, Foucault considérait Condillac, en plus de Turgot, comme un des représentants de l'utilitarisme et analysait sa théorie comme l'une des composantes clés de l'analyse des richesses de cette époque. Condillac était un représentant de la théorie de la représentation et de la théorie linguistique de cette époque, et écrivait également dans le domaine de l'analyse des richesses. Il se distinguait donc pour Foucault comme un penseur incarnant l'âge classique.

La section VII, intitulée « Tableau général », développe l'interprétation inédite par Foucault de la manière de penser à l'époque classique. Quant à la section VIII, intitulée « Le désir et la représentation », elle donne un aperçu général de l'époque classique.

Keywords: Foucault, Condillac, Les mots et les choses, L'analyse des richesses